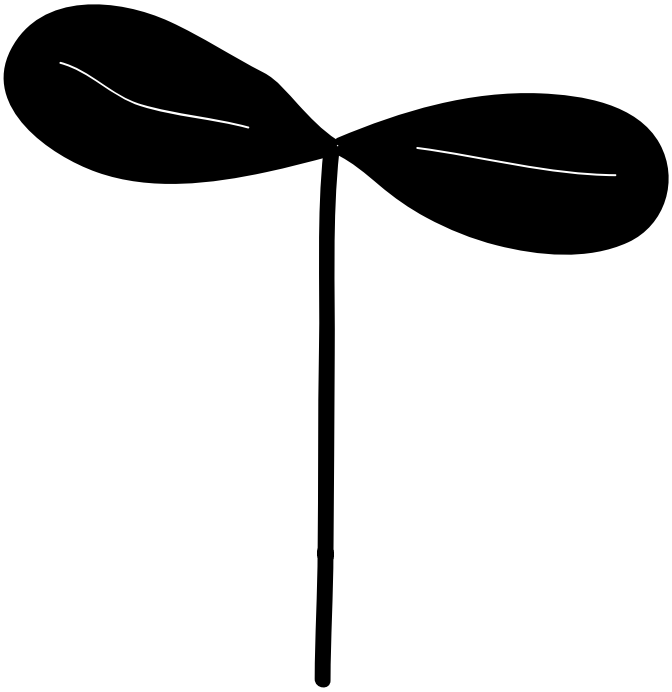
災害ボランティア報告書

７・１３水害 新潟大学ボランティア活動のあしあと

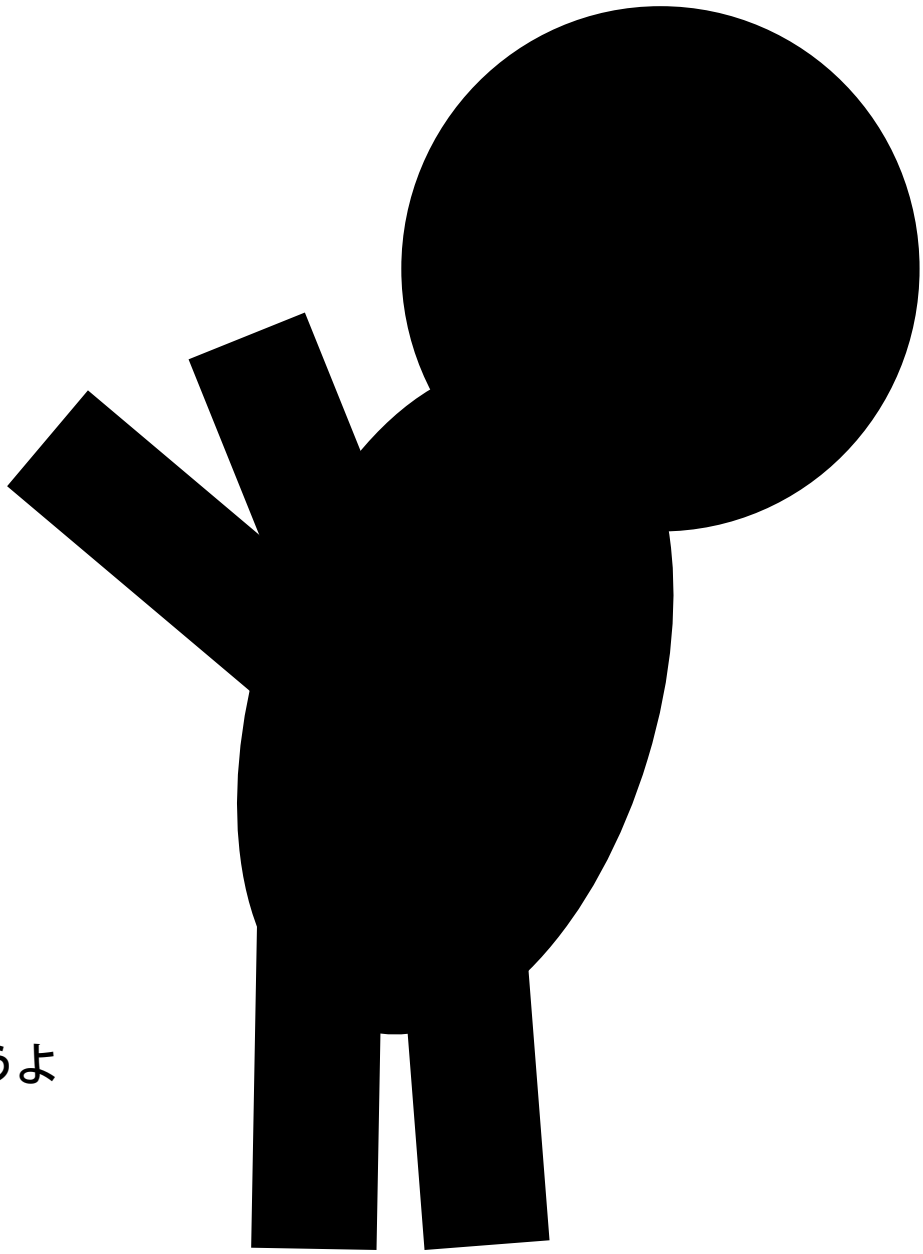
ボランティア実践編

新潟大学

７・１３水害新潟大学ボランティア編集委員会



誰にでもできること
誰でも持っていること



小さな芽を育てていこうよ

本書のねらい

本書は、２００４年に新潟県の県央地域を襲った「7・13水害」に対して、新潟大学がどう復興協力したかという記録集として発行されています。ただし、新潟大学としての活動記録を網羅してはいません。新潟大学以外の人物もずいぶんと登場します。

その点で、本書をお読みになる方は、新潟大学というのはこれだけの活動しかしていないのだ、とは思わないでいただきたい。新潟大学関係者で様々に活動された人もたくさんいますが、とりあげていない方々にはお気を悪くしないでいただきたい。

それでも、本書は、新潟大学の水害復興協力記録なのです。報告書の題名にはずいぶん悩みました。「7・13水害　新潟大学ボランティアの記録」ですとか、「学生にできる（できた）こと」、「ボランティア奮戦記」、などなど。

そもそも、本書の編集の発端は、三条市災害ボランティアセンターの閉所業務の日程が決まり、帰途についた8月1日にさかのぼります。新潟大学近辺まで戻ってきて夕食を食べながら、3週間近くの日々を振り返りました。ニュース報道を見たときのどこか他人事のような感覚（現地に入って活動した後から考えれば、の話ですが）。最初に被災地に入ったときの衝撃。被災者との交流。がむしゃらに汗を流した作業。ボランティア間の交流。充実感。現地にいけない時間に大学で行った募金活動。達成感。来週はもういかないのかな、という一抹の寂しさ。

話せばいくらでも話せたのでしょうが、みなの中になにか、ひっかかるものがありました。これでおわりなのか。もっとなにかできるんじゃないか。もっとしたい。そもそも今までにもっと活動できたんじゃないか。交流を続けたい、等々。

そこからでてきたのが、活動の記録を残したい、次につなげたいということです。どんなきっかけでボランティアをはじめ、どんな活動をしてなにを考えたのか。なぜその活動ができたのか。どんなふうにすれば活動を多くの人に広げていけるのか。そういったことをまとめることで、なにか次の機会に活かせるのではないか。本書を読んだ人がボランティアを始めてくれたら。被災者がボランティアの記録を読むことで元気になってくれたら。ボランティア活動を広げようとする人たちのヒントになったら。

そんな思いを確かめて解散したところ、後日、大学本部から、水害救援ボランティアの記録をまとめないかという依頼がありました。有志での発行を考えていましたが、大学の公的資料を載せる方が充実すること、大学による記録である方がより多くの人の手に渡る可能性があることから、協力することになりました。

しかし、本報告書は、今まで書きましたように、出すことを目的とする一般的な（「一部の」とすべきかもしれませんが）大学の報告書ではなく、学生や市民に読んでもらうことを目的とする報告書です。資料性や学術性という点はおちるかもしれませんが、実用性、公共性の高い報告書としてお読みいただけることを期待します。

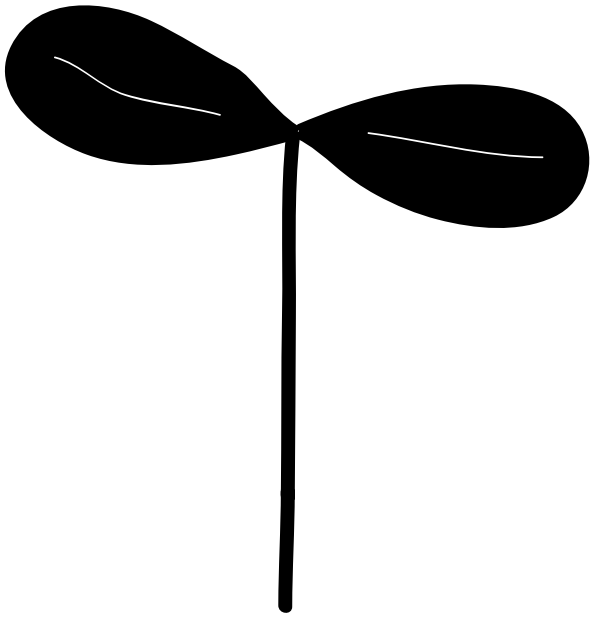
本報告書を読まれた方が、もちろんわれわれも、「次の一歩」を踏み出せますように。

7・13水害新潟大学ボランティア編集委員会

1　踏み出しの一歩

2　できること探し

3　つながりづくり



目次

本書のねらい
目次
7・13水害基礎データ

第1章　踏み出しの一歩

はじめの一歩（はじめてのボランティア） 10
人を動かすもの 12
呼びかけのネットワーク 14
神戸に行けなかった人 16
アルバイトを休んで 18
コラム①見守る人 20

第2章　できること探し

避難所めぐり　22
「現場新聞」づくり　24
離れていてもできるボランティア　26
「子ども遊ばせ隊」の結成　28
専門性を学びながら　30
まなび屋ｉｎ三条　32
コラム②タオル作りのおばちゃん　36

第3章　つながりづくり

吉田キクさん物語り　38
水害ボランティ座談会　42
できたこと、できなかったこと　46
導かれたもの　48
大学の取り組み　50
現場新聞から（Ｈｏｗ　ｔｏ　ボランティア）　52
おわりに　54
コラム③背中に手を当てる人　56

新潟を襲った大災害

新潟県災害対策本部
平成 16 年 9 月 14 日 8：00 現在

				非住家被害	その他被害		
床上浸水		床下浸水		公共施設＋その他	道路	河川	崖崩れなど
棟数	世帯	棟数	世帯	棟	箇所		
2178	2222	6117	6176	6974	2727	950	1904

被害総数

	人的被害				住家被害					
	死者	行方不明	重傷	軽傷	全壊（流失含む）		半壊		一部損壊	
単位	人	人	人	人	棟数	世帯	棟数	世帯	棟数	世帯
新　潟　県　計 (16 市 32 町 17 村)	15	0	2	1	70	68	5354	5437	94	94

７・１３水害

２００４年７月１３日、新潟県を襲った水害は、１５名の方々の尊い命と、たくさんのものを奪いました。しかし、一方でこの水害を通じた助け合いのつながりを生み、我々に対して「何ができるの？」という問いをあらためて投げかけました。

何ができるか不安だったけど、勇気を出して現地に行ってみた。

助けてあげるつもりだったけど、逆に元気をもらった。

現地が心配で、授業もなかなか集中できなかった。

「何も出来ない自分」がそこにいた。

おばあちゃんが、「ありがとう、ありがとう」と言ってくれた。

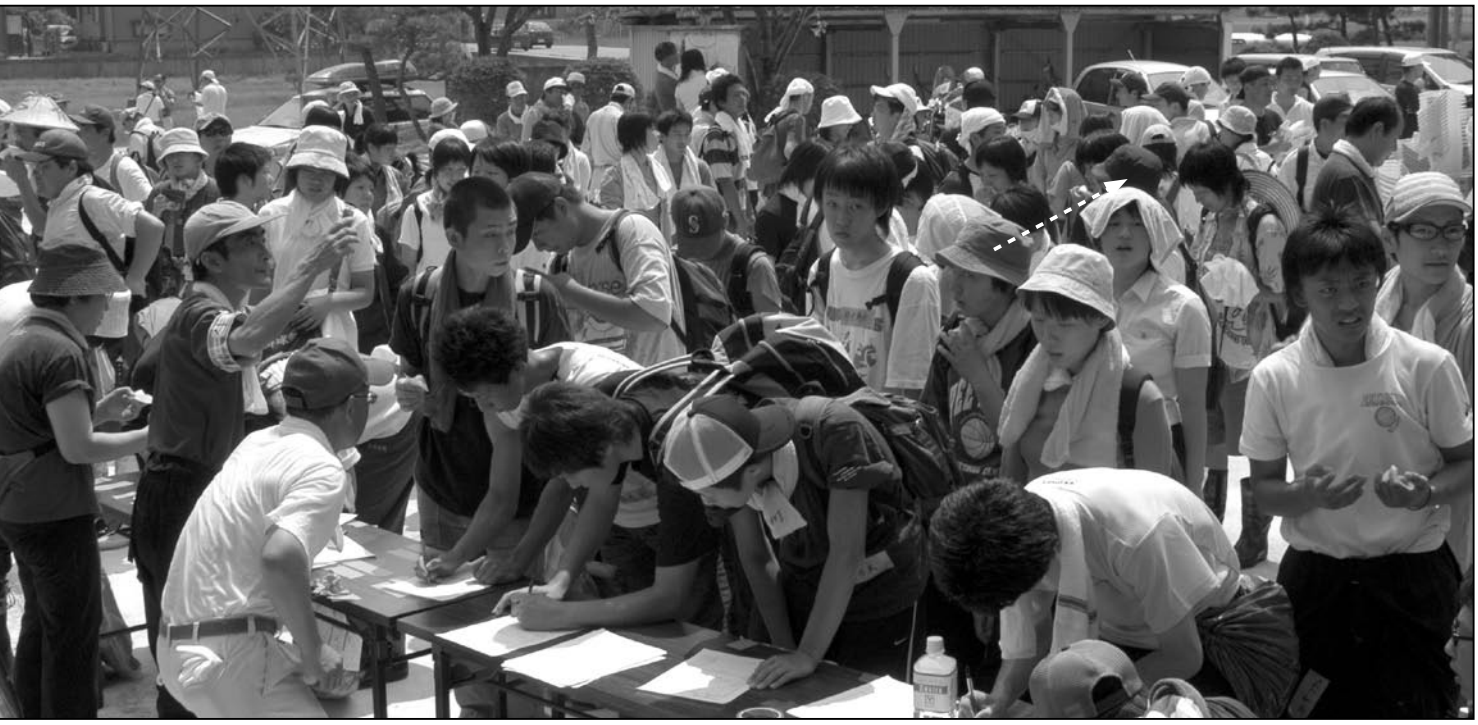
今までの生活で出会えることができない人に、たくさん出会えた。

[ボランティア」というのは、いったい何なのだろう。
私にとって、「ボランティア」はどんな意味があるのだろう。
計り知れない何かが、きっとそこにある。

第1章

踏み出しの一歩

●はじめの一歩（はじめてのボランティア）
●人を動かすもの
●呼びかけのネットワーク
●神戸に行けなかった人
●アルバイトを休んで
コラム①見守る人



▲三条市災害ボランティアセンター。県内初の災害ボランティアセンターとして、県内外のＮＰＯが呼びかけ、三条市社会福祉協議会と合同で立ち上げた。大滝さんをはじめ、本報告書に登場する学生の多くは、ここに本部スタッフとして関わる。

はじめの一歩　～はじめてのボランティア～

大滝優果さん
Yuka Ohtaki

聞き手
清水隆太郎さん

一歩踏み出すのは、とても勇気のいることです。でも、行けばなにかしらできることがある。

自分になにができるのだろう？

Q. なぜボランティアへ行ったのですか？

きっかけは先輩からの呼びかけでした。水害のことはテレビで見て「大変そうだな～」ぐらいにしか思っていませんでした。しかし、実際にボランティアに関わっている先輩の「行けば何かしらできることがあるから」という言葉を聞き、「何かできることあるなら」という思いからボランティアに行くことを決めました。

Q. 実際に行ってみて、どうでしたか？

三条に行って、まず感じたことは被災地の凄惨さ、テレビで見て知っていたはずなのに、そこに広がっていた光景はまるで違うものでした。道や建物はドロで埋り、人々が途方に暮れる中で、「自分たちにいったい何ができるんだろう」という思いが強かったです。

▲▲「ニーズ」を見るボランティア。この「ニーズ」を掘り起こすことが、ボラセンの生命線。

▲ボラセン本部。スタッフは社会福祉協議会の職員や一般ボランティアで運営されている。

「がんばって」なんて言えない。

Q．どんな活動から始めましたか？

最初の活動は、避難所を回ることから始まりました。避難所に避難されている方々にボランティアセンターが立ち上ったことをお知らせするビラを配り、一人一人の方から丁寧にお話しを聞き、何が必要なのかを集めて回りました。自分に何ができるかも分からない、がんばってくださいなんて気安く言葉もかけられない状況で、「せめて元気に笑顔で」声をかけるということを大事にしていました。

Q．「できること」を探しながら「できなかったこと」はありますか？

避難所を回っている時に、とても苦しんでいるおばさんに出会いました。…苦しんでいるというか、今置かれている状況にもうどうしていいのか分からないくらい追い詰められているような…。その方に声をかけられて、何かしてあげたいのだけれど何もできませんでした。それから学校に戻っても講義に身が入らず、「自分はこんなところにいていいのだろうか」と歯痒く感じていました。この時の思いが、後に大学での募金活動につながっていきました。

Q．活動を通して、自分の中で変わったものはありますか？

「思いをカタチにする」こと。それまでは自分の思いを言葉にすることすら不安だったけど、言葉にするだけで、動き出すことで、できることがあると学びました。

Q．専門性の部分で変わったことはありますか？

子どもたちと向き合う自分のスタンスは変わってはいません。ふだん公民館で行っているまなび屋の活動（33ページ参照）と、今回の三条でのまなび屋の活動というのは、自分の中での位置付けが違っているし。もともと自分が持っていた専門性が、被災地で見つけた足りないもの（あったらいいなと思うもの）にうまくマッチしたのだと思います。

～インタビューを終えて～

おそらく災害ボランティアに初めて関わった人のほとんどが感じるであろう「自分に何ができるのか分からない」という思い。自然の脅威の前では、人はあまりにも小さく、己の無力さを突きつけられます。歩くこともできないくらいのドロで埋った町並み、壁も床もはがれ土台ごと流された家屋、避難所内の夏のむせかえるような熱気とそこに雑然と座っている人々、そんな中で学生たちが自分の目で見て、耳で聞いて、心で感じて、「できること」を探し実行しました。それは決して一時のトピックスではなく、「思いをカタチにする」、その思いがつなぐ「はじめの一歩」なのだと思います。

清水隆太郎

ボランティアをはじめる最初の一歩

- ●其の一　**自分の目で見る。**
- ●其の二　**自分の耳で聞く。**
- ●其の三　**自分の心で感じる。**

▲角玄直樹さん。教育人間科学部４年生。
１年生の時から「まなび屋」のメンバーに加わり、
２年生時には代表も務めた。
明るい性格のわりに、「人前で自分を表現するのは苦手」だとか。

ひとを動かすもの

角玄直樹さん
Naoki Kakugen

よく、状況を実際にみていないのに、ああだこうだと判断する人がいるけど・・・

私は、これまで、ボランティアというものを積極的にしたことがありませんでした。ですから、今回の水害が起こった時も、すごいことが起きたと思ったぐらいで、最初は特に何も行動しませんでした。

しかし、水害が起きて数日したある日、先輩から一通のメールが来ました。内容は、水害の被害にあった家に行き、家具や泥出しのボランティアをしないかというものでした。その時、どう思ったのかあまり記憶にないのですが、おそらく、先輩が行かないかと言っているから、時間もあるしとりあえず行くかぐらいに考えていたのでしょう。そんなかんじで、最初は、ボランティアと呼ぶにはふさわしくない気持ちで臨んでいた私でしたが、現地に行き、被害状況を目の当たりにして、そんな気持ちは吹き飛びました。その家は、外は泥が積もっていて、中は、家具がひっくり返り、畳は浮き上がり、泥まみれととんでもない状態で、予想とは大きく違っていました。体力には多少自信のあった私ですが、夏の暑さと強烈な臭いとで、帰るころには頭は痛いし、体もくたくたでした。

２回目に行ったところは、地下倉庫みたいなところがあり、そこの泥や物を外に出す作業をしました。ここは、天井が低く、腰を曲げたままの作業だったの

で、前回よりも過酷でした。復興作業のボランティア自体はたった2回しか行かなかったわけですが、行く前と後でそれまで消極的だった自分が少し変わったのは確かでした。

よく、状況を実際にみていないのに、ああだこうだと判断する人がいますが、私は、今回の水害の現場をみて、実際にボランティアに参加して、何事も状況を実際にみないと何も言えないなと実感しました。すごい、かわいそうと思うことは簡単ですが、そこから次の段階、つまり、自分は何ができるかできないかを考える、あるいは、実際に現場をみてみるといったところに行けるかが、重要だと思います。私は今ようやく次の段階に一歩足を踏み入れることができたのです。

では、今回の水害において、自分をボランティアへとつき動かしたものとは一体何なのでしょうか。先輩に誘われたからと言ってしまえばそれまでですが、おそらく、私の心の中に二つの思いがあったからでしょう。一つは困っている人たちを助けたいという思い、そしてもう一つは、誰かの役に立ちたいという思いです。実はそのような思いは強かれ弱かれ誰にでもあるのではないでしょうか。行く前に私のように自ら積極的に動かなかった人でも、そういう気持ちがあり、身近な人から声をかけられれば行くと思います。一度行って現場をみてしまえば、次に行くときや、別の何かが起きたときには、積極的に動くこともできるでしょう。そして、今度は自分が身近な人に声をかけることで、その人も、そのまた次の人もというふうに広がっていけばいいと思います。

▲▲水害があったときは、これからの自分自身の進路選択で悩んでいたと言う。

▲子どもたちにはいつも大人気。子どもたちに取り囲まれることが多い。

角玄さんの後輩に向けたメッセージ（「まなび屋」のインターネット掲示板より）

7/18　ボランティアのすすめ

今日、7.13 水害の救援ボランティアで三条に行ってきました！　86 歳の一人暮しのおばあちゃんの家の復旧作業をしたんだけど、とにかくすごかった。一階は泥だらけで家具や畳もひっくりかえっていてとにかく想像をはるかに超えていました。で、泥と家具類を外に出したりしたんだけど、これまた予想外に大変でした。おそらく明日は筋肉痛で動けないだろうな。でも、すごくいい経験だったと思う。で、今日の作業を終えた後、避難所にいるおばあちゃんのところに行っていろいろお話してきました。そこで思ったのですが、おばあちゃんは、いつも話し相手がいないらしく、うちらが来たらすごく喜んでくれてたくさん話してくれました。もちろん、復旧作業のボランティアも必要ですが、実はこうした一緒に話しをしたり、食事をしたりというボランティアもとても重要だということです。力仕事は苦手って人も話しを聞いたり食事をしたりなら簡単にできるよね。まだまだ復旧には時間がかかるそうなので、みなさんも、ちょっと時間が空いてるときなどに、ぜひそんなボランティアをやりませんか？　自分が誰かの役に立てるっていいもんですよ。おしまい。

8/14　無題（※まなび屋 in 三条を終えての感想）

ボランティアスタッフというより、自分も子どもたちと同じ様にはしゃいでいました。そのため、一番重要な安全面については多少疎かになったかもしれません (反省)。だけど、とにかく楽しいの一言でした。やっぱり子どもはかわいいし、自分の名前を呼んでくれる子もいたりしてほんとうれしかったです。三条へは、泥上げなどのボランティアにも行ったけど、やっぱ子どもと関われるボランティアはいいものです。今度は 20 日ですが、もっと多くの人にもぜひ体験してもらいたいです。ぜったい楽しいよ！

ボラの「こころ」を角玄直樹さんから学ぶ

●其の一　**自分が何ができるかを考える。**

●其の二　**積極的に動いてみる。**

●其の三　**身近な人に声をかける。**

▲布施健太郎さん。教育人間科学部４年生。
１年生のとき、地域教育実践研究事業「まなび屋」
を立ち上げ、初代代表を務める。
代表といっても、いわゆる「リーダー」ではなく、
皆をつなげる役目に徹していた。

呼びかけのネットワーク

布施健太郎さん
kentaro Fuse

多くの人の力が必要とされる災害時において、縁の下の力持ちのように、それらの人を「つなげる」役割を担う人がいます。

「〇月〇日新潟県三条地域を大水害が襲いました。」

ニュースでは、現地では避難所生活を余儀なくされている人が数多くいること、物資が不足していること、ボランティアの協力が必要なことが連日報道されていました。私は三条という身近な地域で起こった水害ということで他人事とは思えなかったので何か協力できることはないかと考えていましたが、実際どうやって動いたらいいのかわからないという状態でした。そんなときに先輩から、現地でボランティアセンターが立ち上がって人材が必要とされていること、どんなことでもいいからボランティアに協力してくれる人を集めてほしいとの連絡がありました。

「とりあえず」感覚のきっかけづくり

私は大学では地域教育実践研究事業「まなび屋」という活動を中心にボランティア活動をしていました。まなび屋のスタッフは普段からボランティア活動に積極的に参加しているし、自分が責任を持って活動するのであればＯＢからのボランティアの要請にも協力を惜しまないという土壌がもともとある場でした。

▲7・13水害後の三条市内。このボランティアたちの姿は象徴的だった。一番手前は布施さん。

この小さなきっかけが次々とリレーされて「まなび屋in三条」のような大きな活動になっていったのでしょう。

きっとまなび屋のスタッフや周りの大学生にも私のように、何か協力したいけど何をしていいかわからないという人が多いのではないかと思い、とりあえずのきっかけづくりのつもりで周りの人に呼びかけてみることにしました。

まなび屋にはスタッフ連絡用の携帯電話メーリングリストがあるので、まず代表の水上さんに「水害のボランティアを募っていて、まなび屋のスタッフに協力してもらいたいのだが、メーリングリストを使っていいか、使うときは代表からメールを流してもらったほうがいいか」という相談をしました。水上さんは「緊急のことだし、話の状況がわかっている布施さんから直接メールを流してください」と快く言ってくれたのですぐにメールを流しました。また、車を持っている4年生は平日からでも現地入りできると思い直接電話でお願いしました。

同じようなイメージを、皆が描いてた。

まなび屋以外の学部の仲間にもボランティアの協力をお願いするだけでなく、自分の周りの人にボランティアを募っていることを伝えてほしいと呼びかけました。ニュースなどでは泊り込んでボランティア活動する人の様子が報道されており、「ボランティア＝長期的な活動」というイメージがあったので、一日だけでも、日帰りでもいいから何でも協力できることをやりましょうという、誰もが参加しやすい雰囲気になるよう心がけました。メールにはすぐに十名ほどの参加希望の返信が来ました。「土日だけでもいいなら協力できます。大丈夫でしょうか？」「○曜日なら車出せます。その日だけでもいいですか？」というような声が非常に多かったので、みんなも同じようなイメージを抱いていたのでしょう。思った以上に人が集まりそうだったのですが、私自身はすぐに現地に行けない事情があったのでボランティアの人数を把握して、当日リーダーになる先輩に伝えるという役に徹しました。

今回の水害では私自身は日曜日に2回しか現地に行くことしかできませんでした。私が動いたことといったら先輩からもらった小さなきっかけを周りの人に伝えたことくらいのものです。

「一人ひとりができることは小さくてもそれが集まれば大きな力になる」ということはよく言われることですが、この経験でこの言葉の意味を実感できました。

ボラの「こころ」を布施健太郎さんから学ぶ

●其の一　**協力を惜しまない土壌づくり。**

●其の二　**小さなきっかけを作る。**

●其の三　**誰もが参加しやすい雰囲気づくり。**

▲雲尾周さん。新潟大学大学院現代社会文化研究科助教授。教え子だけに留まらず、たくさんの学生とともに三条へ通う。恵まれた体格で〝泥だし〟作業のときは、学生よりタフだった。

神戸に行けなかった人

雲尾　周さん
Shu Kumoo

「気持ちはあるのだけど、行けなかった」こんな思いを抱いている人は随分といると思います。今回の水害で活躍した人の中にも、阪神淡路大震災のとき、ボランティアに行かなかった人がたくさんいました。そんな人に、今の気持ちをお聞きしました。

―大学時代のボランティアの様子を教えてください

大学1年の時にボランティアを始めたんですね。京都新聞社会福祉事業団のキャンプアドバイザーというもので、夏休みには琵琶湖のキャンプ場で関西の様々な団体、とりわけ障害児者を中心に受け入れて活動するので「キャンプ」という言葉がついていますが、スキーキャンプに行ったり、「車イス自立への旅」というものに介助で加わったり、社会福祉に関わる様々なボランティアをしました。

行けなかった阪神・淡路

―阪神・淡路大震災のときはどうしていましたか

京都のワンルームマンションにいました。95年1月17日、なぜか朝5時45分に目がさめたんですね。あれー、はやいな。まだねれるなぁー、ってぼーっとしてたら、いきなり揺れが来て。うわー、地震だー、本棚が倒れたら片付けが大変！　ベッドから手を伸ばして本棚を押さえてましたね。

▲▲学生たちの想いを汲み、「まなび屋 in 三条」をサポート。相談に乗っている一コマ。

▲学生たちに囲まれて、泥だし作業も一休み。

—ボランティアには行きましたか

ボランティアには行けなかったんです。いや、行かなかった、というべきかな。行けたのに行かなかったんだから。大学院の最終学年で、あと2ヶ月でオーバードクター、いわゆる就職浪人というものになるとこでした。それがひっかかっていたのもあって。その年の4月くらいに他の大学の先生から、「神戸に行ったんか」と聞かれました。負い目だったんですねぇ。なんやかんや言ってごまかしてたら、「四の五の言わんと行ったか行ってないかだけ答えい。私は行ったで。あれは見なあかん。経験せなあかん」と一喝されました。

こころの負債

—負い目だったのですか

大学入学から10年間、ボランティア、ボランティア言ってるくせに、肝心のときに行かなかったことが負い目でしたね。自分のボランティアっていうのは上辺だけで、本当のボランティアじゃなかったんじゃないかって考えることもありました。心の負債でした。

—負債でした？　今は？

今は少し返せたかな、という気持ちです。7・13水害の状況をみて、ここで行かなければ神戸の二の舞になる、これ以上借金を増やしてたまるか、って感じです。

三条、中之島に行って、炎天下の作業をして。学生も連れて行って、さらに学生が小学生との交流活動をしたいといいだして、それが実現できて。心の借金が大分減りました。

—他にもそういう人がいるということですが

三条のボラセンで活躍されていた方で、関西から新潟に戻り2月からの仕事が決まっていたそうです。そこに地震。知り合いもたくさんいるし、神戸に行こうか悩んでいるうちに結局仕事が始まってしまって行けなかった、2週間あったから行けたはずなのに、って。三条のボラセンで話して、今回活動できてよかった、という思いを共有しました。

それから中越大地震後、たまたまエレベーターで会った大学院生に、大学に学生のボラセン作るからできたら顔出してって、軽く言ったんです。そしたら彼の顔つきが変わって、「行きます、絶対行きます。夏には活動できなくって悔しかったんすよー」って。水害復興に行けなかったことが心のこりの彼をみて、ああ、ここにもいたんだ、って思いました。彼はすぐに余震の続く長岡でボランティアを始めました。

—ボランティアに行けないことはよくないことなんでしょうか

いや、そういうことはありません。行きたいと思っていても行けない人もたくさんいます。できない状況の時もある。無理することはありません。心の負債もいつか返せる日がきます。災害を期待するわけではなくって、小さなボランティアはいくつもあります。献血や募金もそうです。できるときにできることをする。多くの人がボランティアの心をもつ社会は、すぐそこに来ているんじゃないでしょうか。

ボラの「こころ」を雲尾周さんから学ぶ

●其の一　**無理はしなくていい。**

●其の二　**できるときにできることをする。**

●其の三　**小さなボランティアもたくさんある。**

▲笑顔が眩しい小林さん。教育人間科学部２年生。いろいろと寄り道をしてきて、今は 27 歳。今まで回り道した経験がボランティア活動に役立ったと話す。“頼れる同級生”として、慕う仲間も多い。

アルバイトを休んで

小林隼也さん
Toshiya Kobayashi

手伝いをしたいと強く思っているのに、何もできない自分が悔しく、いてもたってもいられなくなった。

変わり果てた街

7月13日。この日は結構強い雨が降っていたが、まさかこんなことになっているとは思わなかった。三条から来ているクラスメイトから「家から電話がかかってきて、もう床下まで水が来ているらしい」という話を聞いても、どこか遠いとこで起きている話であるかのようだった。そんな自分にとって、今回起きた水害が他人事とは思えないようになったきっかけは、家に帰ってから見たニュースの映像であった。そこにはかわりはてた町の様子が映っていた。私は小学校卒業まで三条に住んでいたのだが、そんな見慣れた町並が大水に飲まれてしまった姿があった。とても悲しい気持ちになった。このとき初めて今回の水害が他人事ではなくなった。と同時に、何かできることがあるなら何かしたいという気持ちが自然と湧いてきた。私も行かなければならないと強く思った。

何も出来ない自分が悔しい

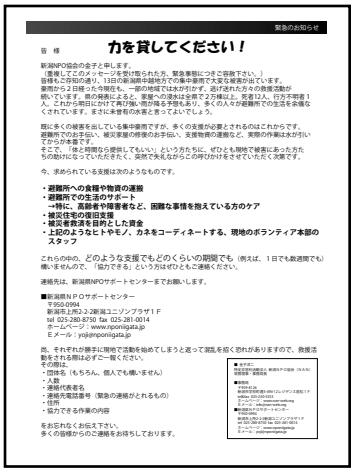
このときはまだ大学の講義が行われている時期。大学の授業に出ることは私たちの本業でもあり、それをおろそかにしてまでボランティアに行くことはできない。行くことができるとすれば授業のない土日となってしまう。しかし、土日は毎週のようにアルバイトをしていた。アルバイトというものはたいてい前もってシフトが組まれているものであり、どうしても重要な用事でもない限り急に休むことはままならず、私はボランティアに参加できず歯がゆい思いをしていた。そんな矢先、私たちの仲間からボランティアに行ってきたという話を聞かされる。行った者は「他人事とは思えなかった」「きっかったが行ってよかった」とみんな話していた。そんな話を聞いて、行って手伝いをしたいと強く思っているのに何もできない自分が悔しく、いてもたってもいられなくなった。

▲▲温厚な性格で、年下の同級生だけでなく、後輩にもにも命令口調はない。いつも同じ目線なのだ。

▲「まなび屋 in 三条」ミーティングでの一コマ。まなび屋では副代表を務める。自ら表に出るより、サポートが得意である。

嘘をついた1日

そこで、私は行動を起こした。アルバイトを休むことにしたのである。ボランティアに行くという理由では認められないと思い、授業の補講があるという、うその理由で1日だけ休ませてもらうことにした。うそをついてしまったが、これでボランティアに行くことができた。私が最初に行ったのは7月24日、中之島であった。この頃は水害から10日経ち、片付けも進んできてはいたが、車は泥に埋まってひっくり返ったままであったり、1階部分がなにもない状態であったり、ひどい状況に変わりはなかった。しかも、このころは夏の強い日差しが容赦なく降り注ぎ、こんな中で作業をすることは肉体的にもきついものであったと思われる。私は側溝の泥上げを中心に手伝わせてもらったが、わずか数十メートル分の泥上げでも丸一日がかりであった。私もこんなつらい思いをしたということは、この地域の人たちは比べ物にならないくらいつらい思いをしているはずである。なのに、笑顔で「ありがとう」と言ってくれ、飲み物を出してくれたりしたのである。これで、疲れは吹き飛んだ。行ってよかったという気持ちにさせてもらった。



緊急のお知らせ

力を貸してください！

皆 様

新潟NPO協会の金子と申します。
（重複してこのメッセージを受け取られた方、緊急事態につきご容赦下さい。）
皆様もご存知の通り、13日の新潟県中越地方での集中豪雨で大変な被害が出ています。
豪雨から２日経った今現在も、一部の地域ではまだ引かず、過ぎ去ったあとの救援活動が続いています。県の検討によると、豪雨への復旧は全県で２万棟以上、作業員２人、行方不明者１人、これから明日にかけて再び強い雨が降る予想もあり、多くの人々が避難所での生活を余儀なくされています。まさに未曾有の水害と言ってよいでしょう。

既に多くの被害を出している集中豪雨ですが、多くの支援が必要とされるのはこれからです。
避難所でのお手伝い、被災家屋の修復のお手伝い、支援物資の運搬など、実際の作業は本格的に始まってからが本番です。
そこで、「体と時間なら提供してもいい」という方たちに、ぜひとも現地で被害にあった方たちの助けになっていただきたく、突然で失礼ながらこの呼びかけをさせていただく次第です。

今、求められている支援は次のようなものです。

- **避難所への食糧や物資の運搬**
- **避難所での生活のサポート**
  →特に、高齢者や障害者など、困難な事情を抱えている方のケア
- **被災住宅の復旧支援**
- **被災者救済を目的とした資金**
- **上記のようなヒトやモノ、カネをコーディネートする、現地のボランティア本部のスタッフ**

これらのなかの、どのような支援でもどのくらいの期間でも（例えば、１日でも数週間でも）構いませんので、「協力できる」という方はぜひともご連絡ください。

連絡先は、新潟県NPOサポートセンターまでお願いします。

■新潟県ＮＰＯサポートセンター
〒950-0994
新潟市上所2-2-2新潟ユニゾンプラザ１Ｆ
tel 025-280-8750 fax 025-281-0014
ホームページ：www.nponiigata.jp
Ｅメール：yoj@nponiigata.jp

尚、それぞれが勝手に現地で活動を始めてしまうと返って混乱を招く恐れがありますので、救援活動をされる際はぜひご一報ください。
その際は、
・団体名（もちろん、個人でも構いません）
・人数
・連絡代表者名
・連絡先電話番号（緊急の連絡がとれるもの）
・住所
・協力できる作業の内容

をお忘れなくお伝えください。
多くの皆様からのご連絡をお待ちしております。

■事務局
新潟県NPO協会内、新潟市中央区一番ＳＴＶ向かい
担当部長：金子和弘

■事務局
〒951-8116
新潟市中央区一番ＳＴＶ向かいビルヤマシタ会館２Ｆ
tel 025-281-8750
ホームページ：www.npo-net.or.jp
Ｅメール：info@npo-net.or.jp
■新潟県ボランティアセンター
〒950-0994
新潟市上所2-2-2新潟ユニゾンプラザ１Ｆ
tel 025-280-8750 fax 025-281-0014
ホームページ：www.niigata-vc.jp
Ｅメール：yoj@nponiigata.jp

◀水害発生後2日目にまわってきたビラ。新潟県ＮＰＯサポートセンターから送られてきた。

行動を起こすこと

私は、これまでこのような活動に参加したことはなかった。今までに「何かお手伝いしたい」と思うことは何度もあったのに、なかなか行動に移せない自分がいた。今回は特に水害の被害を受けた三条地域が小学校卒業まで住んでいた土地だったから他人事とは思えず、迷いなく一歩を踏み出すことができた。また、そのことで、現状を自分の目で見ることができて、いろいろな人と話すことができて、それが自分自身にとって何事にもかえられない貴重な経験になった。これは行動しなければ得られなかったこと。もちろん、すべきことをこなすことは他者に迷惑をかけないという点でも重要であるが、できる範囲、許される範囲で行動を起こすことがいかに重要か学んだ気がする。行ってよかったと思っている。また、これからも、自分のできる範囲で何かできることがあれば、一歩を踏み出して行動していきたい。

ボラの「こころ」を小林隼也さんから学ぶ

●其の一　**他人事にしない。**

●其の二　**悔しさをバネに。**

●其の三　**すべきことはこなす。**

見守る人。

飛び込んできたメール

水害お見舞い申し上げます。
２９日は私たち夫婦の新潟大学の前期授業の最終日でした。夫婦で学生してます。
昼休み図書館横の広場で教育人間科学部の学生９人ぐらいでしょうか
水害募金活動を炎天下のなか学生たちに呼びかけていました。
もちろん私たちも募金協力しました。
その中の女子学生の一人が現地で壁に情報を書いて張り出している本人でしたが、
この情報がたいへん役立ち好評だということを
メール情報で知っていましたのではなしました。
いろんなところで多くの人たちが自分たちのできることで協力していることを知り
うれしかったです。
暑い中大変ですが健康に気をつけて活動してください。

村上市　○○○○

第2章

できること探し

●避難所めぐり
●「現場新聞」づくり
●離れてのボランティア
●「子ども遊ばせ隊」の結成
●専門を学びながら
●まなび屋 in 三条
コラム②優しい気持ちが溢れている現場

７月１７日土曜日、初めて被災地に入りました。
何ができるのかもわからないまま、行けば何かしらできることがあるはずだろうととりあえず向かいました。
目に飛び込んできた三条市内の光景は、私に大きな衝撃を与えました。
道路の両脇に山積みにされた泥まみれの家具。アスファルトが割れた道路。
垣根には、泥水の跡が生々しく残っていました。

避難所めぐり

大滝優果さん
Yuka Ohtaki

住宅街を歩いて

私は一般の泥だしボランティアとは違うことをしました。二人一組で住宅街を歩いて、一軒一軒まわって、ボランティアセンターのチラシを配ったり、必要なもの、困っていることなどを聞いたりしました。家族の多い世帯は自主的に片付けをし作業が進んでいたようなので、災害弱者といわれる一人暮らしの高齢者、老夫婦だけの世帯を中心にまわりました。

ある時のことです。４０代でしょうか、1人のおばさんが私たちのほうに近づいてきました。「どうしたらいいんでしょう…もう何から手を付ければいいのか。私一人だから何もできなくて。……もう頑張れません。」と泣きながら力のない声で話しかけてきた。話を聞くと、被災から3日間ご飯がないので固くなったパンを食べていたのだそうです。そのときにはすでに避難所では配給が始まっていたのですが、そういった情報さえ必要としている人のところへ届いていなかったのです。顔や腕にも小さな傷がたくさんついていました。下手に「がんばってください」とはとても言えません。私はどんな言葉をかけたらいいのかもわからず、ただ手を握りしめて、ボランティアセンターの存在と連絡先を知らせることしかできませんでした。私が泣いてもどうにもならないのですが、涙がこみ上げてきました。「私が泣いてる場合じゃないだろ！」と自分に言い聞かせ何とかこらえましたが、それほど、ショックは大きかったのです。

一人暮らしのおばあちゃん

「この辺に一人暮らしのお年寄りの方はいませんか」と聞いて回りました。教えてもらったお宅に行き、「困っていることはない？」と尋ねると、おばあちゃんは「毎週来る社協の人が来てくれるはずだから大丈夫」と言うのです。一人暮らしをされている方で、こういう方は驚

▲▲決壊現場に程近い神社から、鳥居が 100 mほど流されてきた。

▲公園のフェンスにはびっしりと草が絡みつき、水流の激しさを物語っている。

くほどたくさんいました。その人は確かに来るのかもしれないけど、それを待っていたらいつになるかわかりません。その場でおばあちゃんの名前を聞いて、説明をして、ボランティア要請の電話をしました。

しかもそのおばあちゃんは、足が悪くてご飯を取りにさえなかなか行けないと言うのです。避難所兼配給所は歩いて5分のところにあるのに。取りに行けないから、朝ごはんだけは何とか取りに行って、あとは基本的に食べないのだそうです。ちょうどお昼時だったので、私がおばあちゃんの分を代わりに受け取りに行きました。なかには近所の方が、気にかけてご飯を運んで来てくれるという場合もありましたが、ご飯を届けるボランティアがあったら助かるだろうなと思いました。

また、息子さんと二人暮しでも、その息子さんが消防署に勤めているので、自宅の片付けにまで手が回らず、昼間に一人で少しづつ片づけているおばあちゃんもいました。

このように、一口に被災者といっても、求めていること・必要なことはその人によってさまざまなのです。頭ではわかっていましたが、実際にまちを歩いて直接話して、その現実を目の当たりにしました。

避難所

避難所にいるのは、お年寄りと子どもがほとんどでした。若い人は明け方から夕方暗くなるまで自宅の片付けに出かけるためです。ある女の子は算数ドリルをやっていました。友達もそこにはいないのでお昼ごはんも一人で食べ、両親が帰ってくるのを待っていました。あるおばあちゃんは、昼間は一人で、夜になると帰ってくる息子夫婦を待っているのだそうです。話し相手さえいないので、横になってぼーっとして過ごす時間が多く、精神的な疲れもあるようでした。

私たちが話しかけると、はじめは「この人たちは何者なんだろう」と訝しがっているようでした。でも、腰を下ろして話をしているうちに、それまで自分の中にためていたことが溢れ出すのです。水があっという間に家の中に入ってきたときのこと、脱出するときにボートで救助してもらったこと、仏壇からだんなさんの遺影だけ持ってきたこと、なかなか夜も眠れないこと、食べなきゃ弱るとわかっていても食欲がわかないこと、これからどうしていけばいいのか不安だということ。そして最後に決まって「来てくれてありがとう」と言うのです。このとき、力仕事も必要だけど、精神的なケアも必要なんだと気づきました。話をしながら時間をかけて一緒にご飯を食べること、これも大事なことであり、ボランティアにできることなのです。被災された方と話をしていると、かえってこちらが元気をもらいます。だから、明日も来ようと思うのです。私ができることはたかが知れていると思うけど、それでもそのなかでできることを最大限にやりたいと思いました。

避難所の様子は行く度に変わりましたし、避難所によって、部屋によって、雰囲気もさまざまでした。その違いは、1週間、2週間と日が経つにつれて目立ってきました。お互いに「まぁ、ゆっくりがんばろうや」と声をかけ合いながら生活する人たち。挨拶もほとんどなくお互いを警戒しながら過ごしている人たち。部屋にいる人の9割がお年寄りで、すさんだ目をしている人たちの部屋。そしてその隣は、子どものいる家族が多く、時おり子どもたちの笑い声が聞こえてくる部屋。このような状態でいいのでしょうか。

避難所には市の職員が二人くらいずついましたが、一日交代の当番制らしく、避難所におけるニーズの変化などは把握できていませんでした。もちろん避難所で起こっているこうした問題にも取り組んでいる様子は見受けられませんでした。

こうした状況をボランティアのひとりである私にはどうすることもできません。ただ、この気づきを外へ外へと発信していくことが、私たちの役割だと思いました。

▲大滝優果さん。教育人間科学部３年生。
被災現場を目の当たりにして、大きなショックを受けるが、持ち前の行動力を活かし、現場新聞作り、募金活動、まなび屋 in 三条、そして新大震災ボランティア本部に関わる。

「現場新聞」づくり

ありのまま、自信を持って伝える

大滝優果さん
Yuka Ohtaki

３日間ひたすら住宅街を歩き回り、避難所を訪ね、話を聞きました。

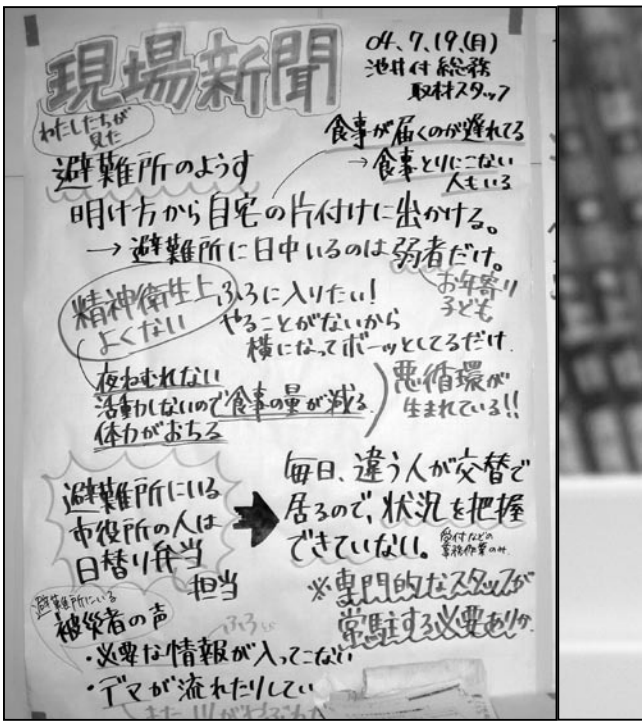
３日目、ボランティアセンター本部に戻ると、ある人からお叱りを受けました。「君たちは何をやっていたんだ。ただ歩き回って、話を聞いて、それで終わりなのか」と。

私たちは、集めた情報を自分たちの手の中に留めたままで活動を停止してしまっていました。現場を自分の足で歩き回り、被災者一人ひとりから直接集めた膨大な、そして貴重な情報。それなのに、活かしきれずに持て余していました。B４サイズの紙に整理して、総務の近くの壁に貼るということはしていましたが、それを見るのはほんの数人。

貴重な情報だからこそ、それをたくさんの人が共有できるように伝えていくことが大切なのだと気づきました。そして、壁新聞を作ろうというアイデアが生まれたのです。名付けて「現場新聞」。その日、自分たちが実際に見た・聞いた「現場」の情報を発信していこう。みんなで情報を共有していこう。

現場と本部をつなぐ

現場の状況は刻々と変化していました。しかし、その変化に本部は対応が追いつかないようでした。それもそのはず



▲ボランティアセンターの壁に貼られた現場新聞１号。この後、第５号まで発行された。

です。本部スタッフは朝早くから、夜暗くなるまでずっとセンター内にいて、ニーズの受付やマッチングなどの仕事に追われていました。現場に出向いている暇はありません。本来であれば、現場の様子をもっともよく把握しておかなければならないのに。現場で起こっていることと本部の対応にずれが生じてしまうのも無理はありません。（まさに「事件は会議室で起こってるんじゃない！　現場で起こっているんだ！」という心境でした。）

私たちが集めた情報を発信したことで、本部内に新しく災害弱者チームが編成されました。情報を生かすも殺すも、その伝え方とタイミング次第だと思いました。

伝えたいことを書きたいように

現場新聞第1号。何をどう書けばいいのかわかりませんでした。縦書き？横書き？模造紙は真っ白なまま、私は考え込んでしまいました。「このことはみんなに伝えなきゃいけないなと思うことを、あなたが書きたいように書いていいんだよ」そう言われてだいぶ楽になり、とりあえず書き始めました。下書きはしませんでした。もし、下書きをしたら、何度も書き直しをしてしまっていつまでも完成しないような気がしたからです。そうして何とか書き上げました。体裁は満足がいく出来ではありませんでしたが、伝えたいと思ったことは書けた気がしました。

いつの間にか現場新聞を書くのが楽しくなってきました。毎週土日は三条に行って歩き回ることが習慣になり、地図なしで三条市内をどこへでも行くことができるほどになりました。避難所を回ったり、民家の後片付けの手伝いに行ったりして1日を過ごし、夕方になるとセンターに戻り、体育館の一角で床に腰を下ろし模造紙を広げるのです。その日ボランティアをして気付いたことやこれからボランティアに行く人に知っておいて欲しいことなど内容はさまざまでした。例えば、初めてボランティアに来た人のために、泥出しの時にあると便利な道具リストを紹介したり、カビや異臭が発生し始めた時には、マスク着用やこまめに手洗いすることを呼びかけたりしました。また、ボランティアは避難所にはほとんど行かないので、いま避難所はどんな状況なのか、何が求められているのかなどを伝えることも重要なことでした。

現場新聞は第5号まで発行しました。センターの入り口を入ってすぐの、いつでも誰でも見られる場所に貼りました。立ち止まって読んでいる人を見ると、その度に嬉しくなりました。

事実ベースで

新聞を書くときに気をつけたことは、事実ベースで書くということでした。よく言われることですが、テレビや新聞などの情報がすべて本当だとは限りません。災害という特殊な状況下で、情報が錯綜しがちな時だからこそ、その真偽を見極める力が必要です。ましてやこの時は、自分が情報を受け取る立場から、情報を発信する立場になったのですからより一層の注意が必要でした。でも、その点については、私が自分の目で見たことだから、被災者から直接聞いたことだから、そのありのままを自信をもって伝えることができました。

また、情報は必要としている人のところへ必要としている時に伝えてこそ意味のあるものなのだということを改めて感じました。

ボラの「こころ」を大滝優果さんから学ぶ

●其の一　**たくさんの人が共有できる工夫。**

●其の二　**現場の情報をいち早く伝える。**

●其の三　**事実をありのままに。**

▲募金活動を手伝った仲間たち。この他にも、まなび屋のメンバーを中心に、教育人間科学部の学生十数名が、大滝さんの呼びかけに応え、炎天下、大学での募金活動に取り組んだ。

離れてのボランティア

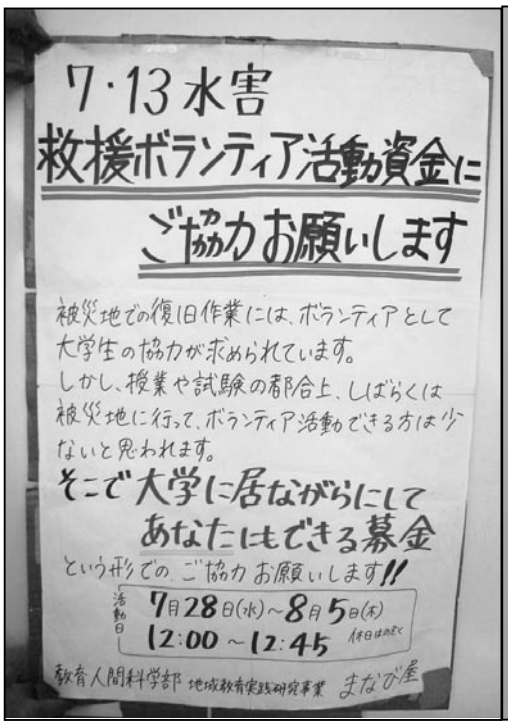
大滝優果さん
Yuka Ohtaki

今も必死で後片付けをしたり、大変な思いをしている人がいるのに、なんだか申し訳ない気持ちになった。

きっかけ

3日間現地で活動して連休明けの火曜日、大学に戻りました。水害が起こる前と何一つ変わらずにいつも通り授業が行なわれる大学。講義を聞いていてもぜんぜん頭に入りません。考えるのは、水害のことばかりです。まちの様子、避難所の様子を思い出しては、溜息をつき、少しでも気が緩むと泣きそうになりました。こうしてわたしが、冷房のきいた部屋でいすに座って教授の話を聞いている今も必死で後片付けをしたり、大変な思いをしている人がいるのです。何だか申し訳ない気持ちでいっぱいになりました。やるせない気持ちが空回りして、手足が震えさえしました。

先生の声が左の耳から右の耳へと素通りし、「ここに座って勉強している場合じゃない！」という思いばかりが募りました。まわりの学生は何を考えているんだろうか。水害のことを少しでも気にかけている人はいるのだろうか。大学なんて休んで、少しでも被災した人のためにできることをしたい。



▲大滝さん手作りのポスター。これを掲示し、昼休みなどに募金活動を行う。

仲間の力を得て

昼休み、そんな思いをまなび屋の友だちにぶつけました。３日間でわたしが見てきた被災地のこと、これから必要になると思われるボランティアのこと、そして、ボランティア活動のためのお金も必要なこと。友だちはわたしの話を真剣に聞いてくれました。そうやって、話しているうちに募金ということを思いついたのです。友だちも「私は忙しくて多分現地には行けないけど、お金という形でなら少しは協力できるし、昼休みくらいなら呼びかけも手伝えるよ」と言ってくれました。

大学はまもなく試験期間でした。大半の学生はレポートの締め切りや試験勉強に追われていました。片付けの手伝いなど現地へ出向いてのボランティア活動が求められていましたが、授業や試験の都合上、しばらくは現地へ出向いて活動できる学生は少ないのではないか、また、現地でボランティア活動したいと思いながらも、きっとわたしと同じように、行けなくて心苦しい思いを抱えている人たちもいると思われました。大学に居ながらにしてできる募金という形での協力は、ちょうどそのときに適していたと思います。大学の学生生活支援課にかけ合い、大学構内での募金運動を許可してもらう手続きを進めるのと併行して、まなび屋のみんなに呼びかけの協力を依頼したところ、快く協力してくれました。

千円ぽんっと入れてくれた学生さん。「一円と十円しかないけど…」と言って小銭入れを逆さまにして中身を全部入れてくれた人。「これ、母から」と千円札を入れてくれた友人。集まったお金を一つの袋にまとめて持ってみるとずっしりと重たく、「これは善意のかたまりだ」と思ったら、何だか余計に重たく感じました。試験のことで頭がいっぱいで水害のことをもうみんな忘れてしまったかもしれないという不安がありましたが、そうじゃないということを確かめることができて嬉しかったです。

でも、誰もがあたたかい反応を示してくれたわけではありません。無関心に素通りして行く人もいましたし、時には冷たい視線を感じることもありました。それでも、まなび屋のみんなは「そんなの気にしない」といった顔つきで呼びかけを続けてくれました。仕方ないのかなとは思いつつも落ち込んでいた私でしたが、笑顔で「お願いします！」「ありがとうございます！」と声を出し続ける姿に勇気付けられました。

私のつぶやきを後押ししてくれた友人、そしてまなび屋の仲間に感謝の気持ちでいっぱいです。私一人では、何もできなかったでしょう。でも、自分から初めの一歩を踏み出して、自分の想いを丁寧に仲間に伝えていけば、それは共感を生み、強力な力となって、何かを実行できるのだということを実感しました。初めの一歩を踏み出すこと。勇気のいることですが、小さな声でいいから思いを言葉にして伝えれば、その瞬間から何かが変わり、動き始めるはずです。

７月２８日～３０日、８月２日～５日の７日間の募金総額は、１６１，３４２円でした。このお金は「新潟水害救援ボランティア活動基金」という新潟ＮＰＯ協会が設置した口座に振り込みました。

お力を頂いたみなさま、ご協力ありがとうございました。

私を勇気付けてくれたもの。
それは、
「私はわけあって現地へは行けない。でも、被災された人たちのために、少しでも何かしたいって思ってた。そのチャンスを作ってくれてありがとう」という言葉でした。

真剣な眼差しで会議を見守る古山さん。
７・１３水害の時、自宅の近所を流れる阿賀野川を見て、「ひとごとでない危機感」を感じた。
教育人間科学部に所属し、普段から子どもたちと関わることが好き。

「子ども遊ばせ隊」の結成

古山祐子さん
Yuko Furuyama

ひとりの力では何にもできず、多くの人の力によって支えられ、そして想いが形になる。

ただひたすらに動いた

私が、三条へ初めて行ったのは7・13水害が起こった6日後の19日。その日はとにかく被災地の状況に驚き、少しでも力になろうと動くことが精一杯だったような気がした。

2回目に三条へ行ったのは7月31日。その日、一緒に行った学生たちと話していて、ふと「そういえば、町で子どもの姿見かけないよね」というつぶやきから、この『子ども遊ばせ隊』が結成された。それまで市内を歩くことはあったが、たしかにいるはずの子どもたちの姿を目にすることは少なかった。私は大学で子どもたちとかかわる活動をしているので、やはり子どものことになるとほっとけなかった。一緒に行った学生も同じ思いだったと思う。

「思い」からはじまる

『子ども遊ばせ隊』というのは、子どもが今までのように外で遊んだり、みんなで遊んだりできるようにしよう！という目的だった。たまたま行った「楽市楽座」でも、小学生の話を聞くことができ、現状としてはやはりみんなで遊ぶことができない、ということがわかった。

私たちが企画をし、イベントを開催す

る場合どこでやったらいいのか、ということも含め、今どのような状態になっているのかを調べるため、現地調査を始めた。

足で探す

まずは、市内の公園の様子や学校の様子を見て回った。公園は、２０ｃｍも流れてきた土が積もっていて、遊具もまったく使えない。また、フェンスも流木や草がはりついていて、とても人力ではどうにもならないような状態だった。公園は国の査定が終わらないと工事ができないらしい。そのほかは、市内の小学校、中学校、保育園、公民館なども手当たりしだい回ってみた。やはりどの場所も水害の被害を受け、子どもの遊び場にできるような状況ではなかった。そんな中、たまたま行った月岡小学校は、水害の被害も少なかったようで、炊き出しが行われたり、ミーティングルームには避難されてきた方が寝泊りをしていた。

声を聞くこと

町で見かける子どもたちに声をかけ、状況を聞いたりした。「いつもは友達と一緒に遊んでいるけど、家の手伝いで一緒に遊べない」「外は暑いし、公園も使えないから、家の中で遊んでる」「みんなといっしょに遊びたい」などという声を聞くことができ、ますます子どもたちのためになにかしたい！という思いが強くなった。

何気ない一言からこのように動きだすことができ、またいろんな人と出会うことができた。この思い・・・私は今回のこの『子ども遊ばせ隊』を通して、思っているだけでは何も始まらない、動いてみることが大切！ということを身をもって実感することができた。思うことはできても、行動に移さなければ何も始まらない。そのはじめの一歩を踏み出すことが大切なのだ。

そして、この『子ども遊ばせ隊』は、のちの『出張まなび屋ｉｎ三条』という企画につながっていく。

▲▲『子ども遊ばせ隊』の名札。三条災害ボランティアセンターで、急遽結成された。同じ想いを持った仲間は総勢８名。

▲「想い」を「形」にしたとき、その「思い」も親友と分かち合った。

▲決壊現場から 100 mほど離れた公園を調査する「子ども遊ばせ隊」。

◀滑り台は１ｍ以上の高さまで草が絡みつき、出口は泥で埋まっている。

ボラの「こころ」を古山祐子さんから学ぶ

●其の一　**とにかく動いてみる。**

●其の二　**声を聞いて、想いとつなげる。**

●其の三　**何気ない一言を大切にする。**

▲泥だし作業の途中で。
世代や地域を越えて、ボランティア同士がつながることも多い。
お互いに、それぞれの得意なこと、専門分野を活かしながら作業に当たる。

専門を学びながら

高橋祐子さん
Yuko Takahashi

熱中症の予防策など作業をしながら呼びかけた

医療に携わる学生として

三条の水害被災者の力になろうという話が出たのは、医学祭という企画の話し合いをしているときだった。新聞などでボランティアの活躍が多く見られる中、医療に携わる者としてもっと活発に動くべきではないか、という意見が出されたのだ。そこで医学祭の中でボランティアを広めるような企画を作って実行委員を中心に呼びかけていこうと決めた。

呼びかけにより人を集めて実際に現地へ行ったところ、やはり看護の手が足りないのか、看護専攻の学生は救護班に回された。真夏であるため熱中症で倒れる人が多い。看護専攻の学生は学んだことを活かして熱中症や貧血などに対して簡単な応急処置をするなど、ある程度実践的なことができるので、医療者になるための勉強を早くも役立てることができた。

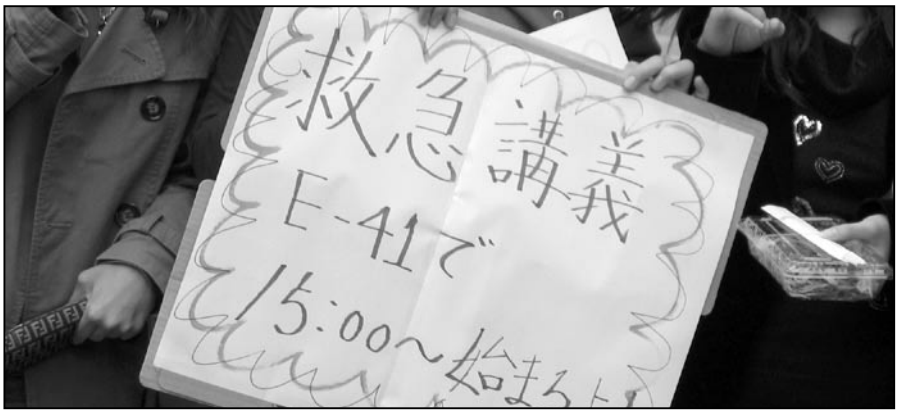
その一方で放射線や検査について学んでいる看護以外の学生は、このような場合に専門性を発揮できないため、多くのボランティアと同様に各家庭の泥掃除や楽市楽座の手伝いなどをした。しかし今の自分たちにできる最大限のことをするために、これらの仕事に取り組むと同時に、熱中症の予防策などを、作業をしながら呼びかけた。

もう一度、会いに行く。

三条ボランティアの募集が終わった後も医学部の学生としてできる限りのことをしようということになった。まずは災害後の心のケアの必要性を考え、夏に泥掃除を手伝った家庭にもう一度訪問し話をした。そのお宅はお子さんも元気で家もすっかり元通りになっていた。まだ不安も多くあるようだったが、突然の私たちの訪問を喜んでくれたようだった。

また、これらの活動をまとめ上げ、展示することで多くの人にボランティアの内容やその効果を知ってもらおうと考えた。そこで医学祭で人が一番多く通る正面玄関に水害ボランティアの写真を展示し、同時に募金活動も行った。

▲炎天下の中での作業は過酷なもの。ボランティアたちは熱中症やカビなどとも戦っていた。



2004 新潟大学医学部医学祭実行委員会 HP より抜粋
http://www.cp.med.niigata-u.ac.jp/i/compclub/fair/body.html

医学祭開催に至ったのは、多くの人が集まる場でボランティアの大事さを知ってもらいたいと思う気持ちがあったから

私たちは医学部の学生であると言っても、結局は学生であるためにあまり専門的なことができるわけではない。そのために力の足りなさを実感することもたくさんある。だが、学生であるからこそ、自由に様々な方法で被災者の方々の力になれるのではないかとも思う。

医学祭の行われる少し前、中越地方で大きな地震被害が出た。新潟県全体が水害に引き続き大変な思いをしている中、医学祭開催に至ったのは、多くの人が集まる場でボランティアの大事さを知ってもらいたいと思う気持ちがあったからである。そしてその気持ちを受け、多くの関係者の方や来場者の方から多大な支援を受けた。これらの活動は私たちが医療に関わる人間であるというだけでなく、学生であるからこそできたことであると思う。私たちのこの活動が、多くの方にボランティアを知ってもらうきっかけ、これから医療に関わっていく学生の刺激になってくれれば、と考える。

ボラの「こころ」を高橋祐子さんから学ぶ

●其の一　**学んだことを活かす場。**

●其の二　**伝えること。**

●其の三　**自由な発想で創意工夫する。**

▲決壊現場に程近い、三条市内の小学校。幸いなことに、体育館とプールは被災から逃れた。この日は、久しぶりに子どもたちの元気な声が体育館に響く。

まなび屋ｉｎ三条

子どもたちの声をたくさん聞くことができた

古山祐子さん
Yuko Furuyama

私たちは、８月１１、１２日、２０日の３日間、決壊現場にほど近い、三条市の月岡小学校をお借りし、『まなび屋ｉｎ三条』という企画を実践した。『子ども遊ばせ隊』でやってきたことが形になったものである。

８月５日に、まなび屋顧問である雲尾周先生と、私を含め学生４人で月岡小学校を訪問した。校長先生と教頭先生が対応してくださり、私たちが『まなび屋ｉｎ三条』の企画について持ち出すと、快く承諾してくださり、日程の話にもすぐに進んだ。さらにはプールの使用も許可してくださり、私の頭に、子どもたちの喜ぶ姿が目に浮かんできた。まだ会ったことのない子どもたちとどのような時間が過ごせるのだろうか。不安と共にわくわくした気持ちが高まっていた。その日は、先生方のご好意で、これからの企画募集のポスターを書かせてもらい、子どもたちの目につきやすい場所に張らせていただいた。

ここからは、実施した3日間について、私の当時のメモをもとに書こうと思う。

地域教育実践研究事業「まなび屋」

まなび屋は、新潟大学の近く、新潟市西地区公民館で開かれているフリースクールである。新潟市西地区公民館と新潟大学学習社会ネットワーク課程による学社連携の事業であるが、大学生が中心になり、地域の人々や子どもたちと関わりながら、共に学ぶ活動をしている。

平成12年12月、数名の学生たちが立ち上げ、最初は2人の子どもたちが参加する小さな活動であったが、今では（平成15年現在）、前・後半合わせて40人近い子どもたちが参加している。大学生たちが、地域社会の中で、地域の方々から協力を得ながら学びの場を作るという活動である。

まなび屋のメインの活動は、毎週木曜日の夕方に地域の子どもたちを公民館に集めて行われる、「まなびの時間」と「フリータイム」を組み入れた活動だ。「まなびの時間」では、地域の方々や大学生を講師として招き、子どもたちは教養、福祉、環境、伝統芸能、国際交流などのさまざまな分野のテーマについて学ぶ。

また、「フリータイム」では、講師、子ども、保護者、大学生などが世代を超えて自由に交流している。こうした活動の企画・運営のために、学生たちは日ごろから綿密な準備や打ち合わせを行っている。

子ども好きのスタッフが多く、やはり「子ども」のことになると、ほっとけない。

「まなび屋」はそんな思いを持った人の集団でもある。

▲▲水で怖い思いをしても、やっぱりプールは子どもたちのお気にいり。

▲先生の“卵”たちが、子どもたちと一緒に遊ぶ。

8月11日

子どもの参加人数85人。たくさんの子どもが集まってくれた。私たちが作ったポスターや、月岡小の先生方による連絡、子どもたちの口コミで、こんなに多くの子どもが集まってくれて・・・（まぁ正直120人くらい来たらどうしよう・・と思っていたが）受付など、システム的な面でも、初めてということもあり、とまどった面も多々あった。でも、最終的に残ったのは、やはり子どもたちの笑顔だったかなぁ～と思う。この日は、体育館とプールで二手に分かれて、運動会をした。正味30分位しかプールに入れないという状況で、子どもたちは、「もっとプールに入りたい！」という思いをもっているようだった。様々な子どもたちの声をそれぞれのスタッフが聞けたようでよかった。

7月に三条で水害があって、立ち上がったこの企画。子どもにみんなで遊ぶ場所を提供したい！遊んでほしい！ということで“子ども遊ばせ隊”として立ち上げた。その思いが形となった瞬間で、とてもうれしかった。計画を始めると、どうしてもシステムのことが頭の中を占め、「いかに効率よくやるか」など考えてしまった。でも、

最初に思った気持ち、もっと大切にしなきゃ！

と気づくこともできた。

8月12日

この日も子どもは80人を超えた。11日の様子からみて、全員プールに入れるように変更した。列車リレー、水中鬼ごっこをしたり、自由時間では風船を使ったり・・・。とても楽しい時間をスタッフ自身も過ごすことができた。もちろん、子どもたちの笑顔もたくさん見ることができた。とってもうれしかった。1日目の反省も生かし、

できるだけ、子どもの声に耳を傾け、大切にしようと、子どもたちと接した。

1日目も来てくれた子は、私のことを「ペン子～」って呼んでくれたり、玄関に着くなり「今日もげん、いっきーくる？」って聞いてきたり。わずかの時間でも子どもたちとスタッフの間につながりができたようだった。

子どもたちは、水害という被害を受け、中にはその影響で水が怖い、という子もいる。それでも、元気いっぱいに遊ぶ子どもたちの姿があった。子どもたちにはやっぱり、みんなで遊ぶ場が必要なのだと思う。その場を少しでも提供し、子どもたちの心を解放させてあげることができたのなら、今回の「出張まなび屋in三条」は成功だったと思うし、やってよかったと思う。

子どもたちの満面の笑顔、
しかし、その心の奥にある水害の体験に触れ、まなび屋の学生は真剣に向き合おうとした。
最終日の終了間際、「また来てね」「今度はいつ？」と、多くの子どもたちが別れを惜しんでいた。

8月20日

この日は、11・12日とは異なり、参加する子どもは申し込み制で、お昼を挟む一日ものの企画だった。参加者は37名。

お昼は豚汁を出すため、前日から、スタッフの協力を得て、豚汁を作った。当日もスタッフの手によって、おいしい豚汁ができた。

企画の段階で、晴れと雨の場合を考えていたが、この「子ども遊ばせ隊」を結成したときに最初に思いついた「まちの流木などを集めての工作」をどうしてもやりたかったので、ずっと晴れの方で考えていた。でも、台風のため、当日は雨バージョンで行うことになり、だいぶシステム的な面で、落ち度があったように思う。スタッフの意思も統一し、もっと打ち合わせをしておけばよかった、とも

つながり　小林重久

水害が起き、何かしたいと思っていた。でも、何も動き出せない自分がいた。募金活動に参加したが、被災地に直接行っていないため、役に立っているのかどうかが今ひとつわからなかった。そんな時に「まなび屋 in 三条」企画の話を聞き、「現地を見たい」「子どもたちに会いたい」と思い参加した。行ってみると、思っていた以上に子どもたちは笑顔だったので安心した。みんな楽しそうに遊んでくれて、水害があったなんて感じさせないくらい元気だった。僕は、初日と２日目に参加し、３日目はバイトで不参加の予定だった。しかし２日目のこと、仲良くなった男の子に「しげ、次も来る？」と聞かれた。「バイトだから無理」と答えると、「休んで来て。休ませてくれないなら、辞めますって言いな」と言われた。「困ったな」と思いながらも、自分が来ることを楽しみにしてくれる子がいるのだとわかり嬉しかった。結局アルバイトを休んで３日目も参加したが、その中で仲良くなった二人の子どもと、まなび屋 in 三条が終わった後も遊んだ。二人とも同じ学年で、甘えん坊としっかり者。彼らと街を散歩しているとき、「水害のとき、この店、すげかった」と、どういう状況だったかを二人は明るく話してくれた。でも、水害が起こったときは、とても怖かったり、びっくりしたようだ。いくら僕に明るく話してくれているとは言っても、やはり水には敏感になっているようで、しばらく経って台風が来たときに、突然彼らから電話がかかってきて、「そっち、大丈夫？　川、水溢れてない？」と、逆にこっちが心配されてしまった。

二人は「まなび屋 in 三条」がとても楽しかったらしく、「またやってよ」と言ってくれた。そう思ってくれている子がたくさんいるのかと思うと、僕自身もまたやりたいと思った。今度は被災したからという理由だけではなく、子どもの居場所、子どもが遊ぶ場を作る意味でいろいろなところでやりたい。子どもが楽しんでいるときの笑顔。それを見ると、僕は幸せな気分になる。二人とは、今回の企画がなかったら出会わなかった。そして、また出張まなび屋が出来るように、このつながりを大事にしていきたい。

思う。でも、どうしても子どもたちを楽しませたい！という気持ちに変わりはなかった。そして、参加したスタッフが「楽しい」と思えることも大切なことだと思うし、やはりそのもとになっているのは、子どもの笑顔だったと思う。

この日、参加した子どもの半分は11・12日の2日間とも参加者で、全体の8～9割は第1弾も参加した子たち。みんな、楽しい、という思いを感じていてくれたようだった。

この日は1日企画だったこともあり、私は前2回よりも子どもと多く話をすることができた。水害のときの状況、この企画に参加しての感想・・・。「水害のとき、学校に夜中の1時くらいまでいて、ちょっと寝ようと思ったら小学校は危ないから他のところに避難したんだよ。みんな一緒だった」など。いろんな思いを抱えている。でも、こうやって、みんなと遊べるのはいい！！またやりたい！という声をたくさん聞くことができて、本当にうれしかった。この企画を立ち上げたときの思いが、子どもたちに届いたようで、本当にうれしかった。

最後に、この企画が、ここまでくるのにたくさんの人の協力を得て、やってこられた。はじめの思いに背中を押して、ずっと支えてくれた宮崎さん。私たちの思いをくみ取り、月岡小学校に交渉に連れて行ってくれ、計画段階からこの3日間も支えてくれた雲尾先生。私たちのこの思い、呼びかけに賛同してくれ、参加してくれたスタッフ。また、「子ども遊ばせ隊」の結成に対し応援し、お菓子を準備しておいてくれたボランティアセンターのスタッフの方々・・・。

この企画を通してたくさんの学びがあった。ただただ、思っていただけでは、何にも始まらないということ。企画する時には何が必要なこと。人とのつながりを大切にすること。そして、たくさんの出会いがあった。学ぶことだらけのこの企画。本当によかったと思う。支えてくれた多くの人に感謝します。ありがとうございました。

ボラの「こころ」を古山祐子さんから学ぶ

●其の一　**思っていただけでは、何にも始まらない。**

●其の二　**企画する時には何が必要。**

●其の三　**人とのつながりを大切にする。**

優しい気持ちが溢れている現場。

「そこにあったもの」　　塚越　由佳

私は、各避難所へタオル配りをしました。そこで１人のおばあさんと出会い、「自分の家は全壊だけど、娘夫婦の家の修復を助けてあげたい。そしてボランティアの有難さを痛感している」と泣いていたおばあさん。私はその姿を見て涙が止まりませんでした。災害に遭ったとき、物理的なものの損傷は目に見えます。しかし、精神的な痛手は目にはなかなかみえないものです。そんなときにどれだけ人と人とが支えあえるかが大切なことだと思います。避難所で出会ったおばあさんは自分よりも娘さんの心配をしていました。復旧の目途も立たない中でボランティアの私たちを温かく迎えてくれました。そんな人の優しさというものを初めて感じた気がします。ボランティアをしている人の中でも多くの方がいてたびたび雰囲気がピリピリするときがありました。そんなとき、「気張らずにいきましょう」と声かけをする人がいました。私が体験した三条市は、「優しい気持ち」で溢れていたと思います。三条市のボランティアを通して、とにかくあの災害を見たときの衝撃は大きかったこと、しかし、実際体験してみるとそこには様々な優しさが溢れていたこと、これらを感じ取れたことが大きな経験となったと感じています。

第3章

つながり作り

●吉田キクさん物語
●水害ボランティア座談会
●できたこと、できなかったこと
●導かれたもの
●大学の取り組み
●現場新聞から（How to ボランティア）
●おわりに
●コラム③背中に手を当てる人

▲吉田キクさん。８６歳。
三条市で、五十嵐川破堤箇所から程近いところに住む。

吉田キクさん物語

佐野智香さん／古山佑子さん／清水隆太郎さん
Chika Sano Yuko FUruyama Ryutaro Shimizu

7・13水害は、想像を絶する被害とともに、私たちに多くの出会いをもたらした。これは、数珠のようにつながる小さな物語りである。

連鎖のはじまり

佐野智香

私が「吉田キクさん」に出会ったのは避難所の体育館でした。広い体育館にキクさんは一人、足を伸ばして座っていました。どんな言葉で話しかけていいのかわからないまま、ボランティアセンターのチラシを握り締めて、思いきってキクさんに話しかけてみました。突然現れた私たちの話をキクさんは丁寧に聞いてくださり、キクさんもまだご自分の話をしてくださいました。キクさんのおうちは一階が水に浸かり、ボートによる救助を待たなくてはならいほど水が猛威をふるった地区でした。そして、避難所に来て以来、おうちには一度も帰っていないことを話してくださいました。そんなキクさんのお話を聞いたとき、多くの一人住まいのお年寄りも同じように、「わがや」に向かうことができずにいるのでないかと思いました。長年住み慣れた思い出が眠るわがやに帰りたい…その思いを口にすることができない方は少なくなかったのではないか。そう思わずにはいられませんでした。

そのとき、一緒に避難所を訪れていた人がキクさんに「一度、おうちを見てきませんか？」と言いました。はじめは「いいよ、行かなくて」といっていたキクさ

▲▲復興作業中にちょっと一休み。ついつい作業を忘れ、ボランティアと一緒に談笑することも。

▲ボランティアで知り合った「孫」たちと、落成記念のおでんパーティーを行った。

んではありましたが、やはり住み慣れたおうちのことは気にかかるらしく、出かけることにしました。私もついていくことになりました。小さなリュックを背負うとき、キクさんは「いつも大事なものはここに入れて枕元において眠るんだよ。13日もこれをもって二階へあがったんだよ」と話してくれました。その小さなリュックはキクさんの背中にとてもなじんでいて、それがどれだけキクさんとともにあるのかをうかがいしることができました。

水害からまだ4日。梅雨前線が居残りいつ雨が降り出してもおかしくない不安定な空のもと、キクさんのおうちへ向かいました。しかし、泥に閉ざされたおうちは簡単には主のために扉を開けてくれませんでした。どうにか玄関を開けておうちの中に入ったとき、その光景を私たちは言葉もなくみつめていました。その生活感を失った部屋の中でも、キクさんの目は一つの襖をみていました。「開かないなら仕方ないよ」とキクさんは言っていましたが、そこにはキクさんの旦那さんが眠る仏壇があるとのこと――開けないわけにはいきません。しっかり、旦那さんに無事の報告をして位牌を持ち帰ろうとしたとき、キクさんは位牌ではなく、「数珠」を持って帰ると私たちに告げました。

そのときは、キクさんの願い通り数珠を持ち帰り、キクさんに手渡しました。それを手にしたキクさんが喜んでくれたのがとても印象に残る一日…となるはずでした。しかし、まさかその「数珠」がキクさんと私たちの間に起こる連鎖の始まりであり、この物語のキーワードであることを、このときは誰も気がつかずにいました。

力をもらう

古山佑子

私が三条へ2回目に行った日、7月31日にキクさんと初めて出会った。その日は、「楽市楽座」という、全国の方から提供してもらった家具を被災された方に無料で提供する、フリーマーケットが開催されていた日でもあった。キクさんの家も1階部分にあった台所用品、テーブルなど生活していくためには欠かせないものが、水害によってすべて使えなくなってしまった状態だった。

そこで、宮崎さんとキクさんと私の3人で、必要なものを得に「楽市楽座」へ向かった。その間、私たちと一緒に行った学生2人はキクさんの家を掃除するということでわかれた。

◀水害から10日ほど経ったキクさん宅の仏間。ボランティアの手によってすでに泥出しは終わり、床板は剥がされているが、崩れ落ちた土壁が、濁流の壮絶さを物語っている。
浸水当時、キクさんは自衛隊の手により、2階の窓からボートで救助された。

「楽市楽座」には多くの人が来ていた。順番待ちの列はものすごかった。とても暑い日で、宮崎さんに並んでもらって、キクさんと私は日陰で待っていることにした。そこで、初めてキクさんと二人でお話をした。水害のときの生々しい状況も教えてくれた。私自身、川の近くに住んでいるということもあり他人事ではないような気がして、話を聞きながら涙ぐんでしまった。それだけ強烈だった。その後もキクさんから、水害が起こった当時の話を聞くことが何度かあった。そのたびに思うのは、どんなに話を聞いて、テレビで状況を見ていたとしても、キクさんの言う「水の音」は決して体験していない私には分からない、ということだ。キクさんも「今まで生きてきて、あんなに水がすごい音を立てて流れてくるのは、初めて」、と話してくれた。本当に体験した人は、どれだけの恐怖と隣りあわせだったのだろうか。想像もできない。

「楽市楽座」では、あらかじめ欲しいと思う物を紙に書き出しておいて、手分けして探してもらってきた。だいたいのものはそこでそろえることができた。その中にこたつテーブルもあり、後で見ると東京都から送られてきたということが分かり、人の暖かさを感じた。

それから、キクさんに何度も会いに行った。キクさんの家の水に浸かった土壁は、高さ1mちょっとのところですべて剥がれ落ちていた。私たちと同じようにボランティアで来ている左官屋さんと、キクさんのご好意により、この壁塗りを体験するということもあった。キクさんが用意してくれた「栗ご飯のカレーライス」をごちそうになったこともあった。私ははじめ、被災されたキクさんに元気になってもらいたい！という思いが強かった。しかし、実際にキクさんに会って話をすると、不思議と元気やパワーをもらっているのは私の方なのだと感じるようになった。

だから私たちも負けないように、行くたびに玄関で「ばぁ～ちゃん、こんにちは～」と元気よく声をかけている。

土壁は一度剥がれ落ちても、その落ちた土を再生して使うことができる。
キクさんの家の土壁修復は、一度剥がれ落ちた土や、水害で運ばれてきた泥を使った。

生まれ変わったキクさんの家の土壁。水害に耐えた庭にあったもみじも一緒に埋め込んだ。床板、壁、畳、そして職人さんなど、再び生活を始めるに必要なものは皆の善意で集まった。

気持ちが集まる家

清水隆太郎

キクさんの家には、たくさんの人たちのご厚意が集まっていました。普段からキクさんを気にかけていたケアマネージャーさん、床板をくれた土建屋の若旦那、畳職人、宮城からグループで来ていた大工さん、災害直後から三条に駆けつけ、車で寝泊りしていた名古屋の大工さん、東京のサラリーマン、町会議員、「何にもないと、つまらないだろ」と言ってテレビをくれた近所の電気屋さん、大学の先生や学生、プータロー、近所のお母さん…。

私はボランティアできてくださった左官職人さんのお手伝いで土壁を塗っていました。土壁塗りの作業はまず、ドロを作るところから始まりました。軒下にブルーシートを張り、家の前の空き地に溜まっていたドロを運びました。そして長靴を履いて、水とワラを混ぜてからひたすら踏んでこねるのです。この作業が本当にたいへんで、まさか水害ボランティアで「ドロを作る」作業があるとは…皮肉でした。

土壁は何層にも重ねて塗っていきます。始めは土で作ったドロを塗り、数日間乾かし、次は砂を多く含んだドロを塗り、乾かし…それを繰り返し、完成までに二ヵ月近くかかりました。

壁を塗っている時に、左官職人さんが紅葉の葉っぱを拾ってきました。そして、「遊び心が大事」と言いながら、壁に紅葉の模様をつけたり、茶室窓を作ったりしました。キクさんもとても喜んでくれて、ボランティアはただやるだけでなく、楽しむ事が大事と、この時知りました。壁を塗っている間、たくさんの話をキクさんとしました。庭に咲いている木や、飼っていた犬の事など、何気ない話をたくさん。その時にキクさんの得意料理は「おでん」だというので、いつか家が元通りになったら「おでんパーティー」をする約束をしました。

それからは、あっという間でした。畳が入り、ふすま、障子、棚、タンス、テレビなどが入りました。キクさんが、やっと一階で生活できるようになったのです。水害発生から三ヵ月、たくさんの人たちのご厚意で、元通りの生活が戻ってきました。12月26日、中越地震のせいで延期になっていた「おでんパーティー」が開かれました。最初にこの家を見た時は、まさかこの家でおでんを食べる日が来るなんて思いもしませんでした。だけど、あの家にはまるで実家に帰ってきたような温かさがありました。それは全て、来る人を温かく迎えてくれるキクさんの人柄があるからだと思います。いつからか、気がついたら私たちは被災者とボランティアの「してあげる」「してもらう」一方通行ではなく、当たり前な、日常的な、人と人との関わりになっていました。

みんながお互いに感謝して、数珠みたいにつながって、輪になっていく…今も、これからも、きっとそんな感じです。

吉田キクさん語録

「水害で何もかも流されたけど、たくさんの孫や友達ができて、かえって私は幸せになった気がするよ。」

座談会は、平成１６年１０月２２日の 18：00 から開かれた。
このとき、「次に災害が起こったらどうする？」という問いかけで閉会したが、皮肉にも、次の日に新潟中越大震災が起こってしまう。
そして、座談会に参加したメンバーの多くが、新潟大学震災ボランティア本部の立ち上げに関わることになった。

水害ボランティア座談会

水害から3ヶ月ほど経ったある日、あの思いを忘れないために、学生の有志が集まり、座談会が開かれた。今まで、なかなか口に出せなかったそれぞれの気持ちを。お互いに確認した。

ボランティアに参加できなくて

残念だったことは実際に行けなかったことなんですけど、その募金の活動をしているときに、本当に大変ですよねって、自分の親戚が三条にいて、この間行ったとき大変だったんですよというふうに話してくださる方がいるんですけど、私はそうなんですかみたいな感じでしか言えなくて、もっと知っていれば、知っていればということはないんですけど、知っておきたかったというか、それは失礼な言い方かもしれないんですけど、何も知らないで知っているかのように募金をお願いしますとか言っているのがちょっといやです。いやというか、別に募金活動をするのがいやだということではないんですけど、そういう気持ちになりました。

子どもたちから学んだこと

僕は今までボランティアをしたいと思ってたんですけど、今回の水害では全然できなくて、「まなび屋ｉｎ三条」も１回しか行けませんでした。

しかも、「まなび屋ｉｎ三条」では、水着もなく、体に自信もなく、プールに入れないなって考えていました。でも、体育館で何かやるからって思い、少し安心はしていました。そのとき、プールの

ほうを見ると、女の子たちが子どもたちと一緒に入っていて、そのうちに僕も誘いにきてくれました。そうしたら、僕の中の血が「遊びたい」って疼きだしたんです。子どもたちが「僕の相手をしてくれて、うれしいな」と思ったんです。

子どもたちと話をしていると、子どもたちは「うちはこうなっている」とか、「お父さんの会社はつぶれて大変なんだ」とか、「おじいちゃんと一緒に楽しく住んでいる」とか、いろいろな声が聞けました。

それを聞いて「災害の体験は辛かったけど、これからのことを前向きに考えることができていいな」と思いました。

水害の残した傷跡とそのあとのことかを感じることができました。

心残りは、プールに入ってもっとコミュニケーションを取りたかったなと思っています。

最初は不安があった

大学での募金活動をはじめる時、試験期間もおわりかけのすごく暑い日でした。「人が日に日に減っていって、募金で集まるお金もどんどん少なくなっていっちゃうんじゃないか」と思っていたんですけど、そんなこともなく本当にたくさんの人が協力してくれて、自分たちが呼びかけたことに応えてくれる人たちがいるというのもうれしかったし、多くの人が気づいてくれたということが本当にうれしかったです。

単に楽しめたことがよかった

台風がきたときに、「まなび屋ｉｎ三条」で知りあった子どもから連絡が来て、「そっちは大丈夫なの」と言われた。「そっちのほうが危ないんじゃないか」って思ったけど、心配してくれてうれしかった。その子とは「まなび屋ｉｎ三条」のあとにも何回か遊んだりもした。それ以外はボランティア活動に参加できなかったけど、単純に楽しめたことで、つながったことだと思う。

思いも深かったまなび屋ｉｎ三条

「まなび屋ｉｎ三条」では計画の段階から携わっていて、思い入れも深くて、やっぱり先生が言ったみたいに不安半分なんだけど、楽しみなんだけど不安の部分もあって、その中の活動の中で子どもたちがすごい楽しかったよとかいろんなことを言ってくれて、そのあとにもう一度やりたいとか、もっと新学期に入ってもやってくれないみたいな話もあって、やってほしいという話がけっこう子どもたちから聞かれて、やってあげたいなとは思うけど、やっぱりこっちの都合もあるわけでやってあげられなくて、つながりがなくなってしまったことが悲しい

なって思っています。手紙でも第三弾でもいいけどそういう形でやってあげられたらなって思いました。

吉田キクさんとの出会いは、２回ぐらいしかキクさんの家には行けなかったんですけど、やっぱり水害に遭っても明るく前向きに生きている姿とかを見れて、すごく、私は勉強になったというか、いい経験をできたなと思っています。

みんな協力的に集まってくれた

うれしかったことは、募金活動をしたいなと思って最初のつぶやきをちょっと話したときに、いいんじゃないといってくれて、そのあとさらに詳しく練って、みんながその日本当に行くことになって、募金活動をしてくれる人を募って、みんな協力的に集まってくれて、あの炎天下の中、しかもテスト期間のころで大変な時期だったんだけれども、みんな本当に協力的にやってくれて、それがまずうれしかった。そこにお金を募金してくれたこともうれしかったけど、みんなの協力が本当にうれしかったです。

あとは水害で出会った人たちというのが、水害がなかったらキクさんとも会わなかったし、月岡小の子供たちとも出会わなかったし、ボラセンにいた人たちとも出会わなかったし、あと清水さん、宮崎さん、こんなにかかわることは絶対になかったと思うし、あの水害のあったおかげといってはいけないけれども、あれがあったから出会えてこういう活動ができているなとすごく思えてありがたいなと思いました。

動き出せば何かが変わる

何か動き出せば何かが変わるというのは、７月１７日に行ったときは、行って何するんだろうというのを、その日行った友達や先輩に聞いたんですけど、おれもわからないという形で何するかわからないまま行って、とりあえず行ったんですけど、行けば何かしら仕事があるし、というので、あとも何かしらのやるべきことがあって、そのたびにあっちで現場新聞を書いたりとか、募金活動も何か自分の思いを誰かに言ってみるとか、動き出せばそこから何かが始まって、どんどんいい方向に回ってくるんだなということを今回身を持って感じました。

水害直後の光景が忘れられない。

あのときの光景がまだすごく鮮明にというか、忘れているといえば忘れているのかもしれないけれども、すごいあの悲惨な状況が思い出されてきて、あのときに声をかけてきたおばさんの声とかも覚えているし、そういうのを思い出すと昨日も…。

ずっと手を振ってくれたおばあちゃん

うれしかったことは、やっぱりお手伝いに行った方のおばあちゃんが喜んでくれたことです。今でも覚えているのが、最後お別れするときにうちらが帰る道はすごい長い1本道だったんですけど、そのおばあちゃんがうちらが1本道を曲がるときまでずっと手を振ってくれて、うちらは何回も振り向くけどまだいる、まだいるってずっと手を振ってくれて、あの光景がすごく忘れられなくてうれしくて、うれしかったです。

メンバーが輝いていた

「まなび屋ｉｎ三条」で中心になったメンバーがもう十分かっこいいんだけれども、いつも近くにいてかっこいいのはわかっているんだけど、なんか、「まなび屋ｉｎ三条」で輝いていて素敵になったなと思います。古山さんを中心に、あと、小杉さんもすごい変わったと私の中では思っていて、すごいそれがうれしくて、という感じです。

古いアルバムの整理を手伝って

これも今でも覚えているんですけど、手伝いに行ったおばあちゃんの家で、ぐしゃぐしゃになってだめになったものをみんなで運び出していたんですね。おばあちゃんがこれはもうだめだと判断して、うちらがそれを受けとって捨てにいくという作業をしていたんですけど、そのときにほとんどだめで捨てなければだめで、おばあちゃんは淡々とやっていたんですけど、古いアルバムみたいなのを私に渡すときにすごい涙をためて涙をぽろぽろ流しながら、これもお願いしますって、捨ててくださいと言ったのが…。私には、忘れられないことでした。

座談会を終えて

みなさんの感想を聞くと、「喜んでもらえた」というのと、「喜んでもらえたというのを聞くと切なくなる」という逆の意見もあり、とても考えさせられました。

ただ、「すごい楽しい」「うれしい」と思ってもらえたことや、「笑顔が見えた」ということが、「相手に喜んでもらおうと思っていた思い」が実った喜びを、みなさんはけっこう感じているんじゃないかなというのを話を聞いていて思いました。

また、「今でも覚えているよ」と喜んでもらえたこともそうだし、反対に「今でもあのときの光景が忘れられない」という言葉を聞くと、みなさんの心にいろんな思いがさらに刻まれ、いっぱいに詰まっているような気がします。

その中で、「誰かと出会うことで、何かが自分の中で変わる」ということ、そして、「その中で動いてみる」こと。さらに、「実際に行動を起こし、また新たに何かにつながっていくきっかけになった」ということが見えてきたというのも、とても感じました。

▲笑顔が眩しい小杉さん。教育人間科学部３年生。水害ボランティアを経験後、中越大震災では新大ボランティア本部の立ち上げに関わるとともに、三条で知り合ったボランティア団体にも参加している。
将来、教職を目指して奮闘中。

できたこと、できなかったこと

小杉真佑美さん
Mayumi Kosugi

被災地の方に元気になってもらいたいと思って参加したボランティアで、逆に元気やパワー、かけがえのない思いを感じることができました。

7・13水害でボランティアに参加して、本当にたくさんの人と出会いました。被災した家の後片付けの手伝いなどをしていて、そこで出会った人から、「がんばってるね」「ありがとう」「暑いからからだに気をつけてね」などたくさんの言葉をかけてもらったことを思い出します。

被災地の状況を見て呆然とし、ショックを受けている私に、「自分にできることをしなくては」という気持ちにしてもらったように思います。

子どもたちと一緒にいると、さらに力を発揮する小杉さん。運動もプールもへっちゃら。

一般の家庭でのボランティアに加えて、三条市では『まなび屋ｉｎ三条』を開催して、子どもたちの楽しそうに遊ぶ顔、ボランティアとしてかかわってくれたスタッフのはじける笑顔を見ることができました。そのとき「今日、出会った子どもたちとこれからも関係が続いていったらいいのに」とボランティアをして感じました。まなび屋ｉｎ三条が終わるときに子どもたちから「もっと一緒に遊びたい」「楽しかった」などの意見が出たとき、このボランティアにかかわってくれたスタッフは、少なくとも私は、「もう一度この地で子どもたちとかかわりを持ちたい」と思いました。

その後

たくさんの人と出会ったこの夏。その後もこの出会いを大切にし、出会った人との関係を続けていきたいと思っていました。

家の後片付けのボランティアでであった人とは、１回だけの手伝いという形になってしまったため、そのときはたくさんの話を聞いたりしたのですが、その後のつながりはまったくありません。たとえ一回きりのかかわりでも、文通などを通して、今のその方の状況などいろいろなことを伝え合ったりすることができたらよかったのにと感じている日々です。

また、まなび屋ｉｎ三条で知り合い、仲良くなった子ども達とのかかわりもほとんどありません。「夏休みが終わって落ち着いたころに第○弾の企画をしたい」などと話し合っていたのですが、スタッフの都合などがあり、まったく話し合い、企画をするということ自体ができませんでした。中越大震災もありましたし。実際に会って一緒に楽しく遊びたい、思い出を作りたいと思っているのですが、なかなか現地へ赴くことができない状況が続いています。

情報化社会といわれる世の中、メールよりも、気持ちの伝わる手作りのものを作り小学校に届けることができたら、ここで触れ合った子ども達との関係は続いていたのでないかと思います。比較的低学年から中学年の子ども達が多かったので、夏休みに一緒に遊んだという記憶は子どもの中では消えているかもしれません。「忘れられていてもいい」一歩勇気を出して、２００４年の夏の出来事を忘れないように、当時のことを思い出せる手作りのものを作り、届けることができたら素敵なことでないかと思います。

実際に活動をすることも大切なこと、そしてその後のつながりを絶やさないことも大切なことだと感じました。

これからの活動で大切にしていきたいと思っています

ボラの「こころ」を小杉真佑美さんから学ぶ

●其の一　**自分が「気づかされる」こと。**

●其の二　**気持ちの伝わる「手作り」ツール。**

●其の三　**その後のつながりづくり。**

▲清水隆太郎さん。水害の直後に、新潟市の実家に戻り、水害復興のボランティア活動をはじめる。新潟大学の学生たちと一緒に活動することも多い。２００４年１２月から、魚沼市の小学校で復興担当教員を務める。

導かれたもの

清水隆太郎さん
Ryutaro Shimizu

聞き手
佐野智香さん

三条から、中越、そして堀之内…、水害・震災・雪害ボランティアを連続して経験した人がいます。

私は頑固なところがあるので、自分で納得して、決めないと動かない。７・１３水害で三条市へいくことも「自分」で決めたことだった。

私が水害のことを知ったとき、県外の地にいた。そのため、水害直後に三条市へ行ったわけではなかった。しかし、新潟へ帰ってくると、すでに自分の中では三条市に行く気になっていた。そこには「戸惑い」「不安」、そういうものはなかった。自分としては行くつもりになっていたが、そこで「どうして行こうと思ったのか？」と聞かれると、うまく答えることができない。言い方が少し悪いかもしれないが、思いつきで「行こうかな」と思っていた。

そんな自分の思いを「つなげて」くれる人がまわりにいたことは、とても幸運であったと思う。もしも思いをつなげてくれる人がいなくて、ボランティアセンターに向かうだけであったのならば、私に何ができたのだろうか。

三条市に行った一日目は避難所をめぐり、「吉田キクさん」に出会った。二日目はトラックに乗ってゴミ捨てをした。三日目になったとき、一人で三条市まで行った。それから毎日のように三条市に通う日々が訪れることになる。朝起きたら出かけることは「当たり前」になっていた。

▲壁塗り作業の合間に一服。キクさんの家は水害後、賑やかになった。

▲▲「吉田キクさん」宅の壁塗り作業。蒸し暑さが続く中、懸命に作業は続く。

▲土壁職人の樋口さん。本書に登場する「吉田キクさん」宅の壁を無償で直したのも、この人である。清水さんが「師匠」と仰ぐ。

三条市に「行こう」と決めた当初、まさかそのときはここまで深く関わることになるとは考えてもいなかった。けれど、それをきっかけに「現在」があることも確かである。

今まで、自分がやってきたことを「ボランティア」という言葉一つで表現することには少し違和感がある。その「ボランティア」という言葉だけでは表せないものがあるような気がしている。

自分の中に「行きたい！」という気持ちがあって、それはだれかに「行け」と言われたわけでもなく、義務でもなかった。「何が自分にできる」とか、「何かしてあげよう」とも考えていなかった。それは思いつきだったかもしれないけれど、自分で納得して、決めて、行ったことであった。

ボラの「こころ」を清水隆太郎さんから学ぶ

「ボランティア」はきっかけにすぎない。ボランティアは、その人の今まで内にあったものを引き出していく、そんな気がしている。

新潟大学でも、災害救援活動を行いました。
課題も多く残りましたが、この経験が後の「新大震災ボランティア本部」設立や、学問としての「復興科学」への取り組みなど、新しいつながりを生みはじめています。

○　対応経過

7月１３日（火）　災害発生（三条市、中之島町、見附市）

7月１５日（木）　学友会委員会

委員会の席上、災害救援ボランティアへの積極的な参加について依頼。

7月２１日（水）

「災害救援ボランティアの募集について」（県災害救援ボランティア本部）を掲示。

大学とし積極的に災害救援ボランティアを支援することを決定し、学生を募集。

7月２２日（木）

「災害救援ボランティア活動について（お願い）」を各学部長・研究科長宛通知。

「災害救援ボランティア募集中」の掲示を作成し、掲示。

7月２２日（木）、２３日（金）、２６日（月）～３０日（金）

現地までの交通手段として大学のバス等を用意し、三条市において災害救援ボランティア活動に参加。

※　大学のバス等：　事務局マイクロバス・アルファード、教育人間科学部附属学校バス、農学部バス
事務局及び教育人間科学部附属学校からは、バスの運転手の派遣についても協力を得た。

※　活動現場については、県災害救援ボランティア本部の指示による。

○　医療救護活動

医学部医学科、医歯学総合病院では、医療救護活動のため医師・看護師を派遣した。

・　7月１６日（金）～8月４日（水）までの派遣人数は、医学部医学科１人、医歯学総合病院１１人。
・　8月５日以降についても医師７人、看護師１８人を派遣した。
・　8月 20 日、10 月８日に開催された「災害時におけるこころのケア対策会議」に参加した。（各日、医学部医学科１人）

○　科学研究費補助金の交付内定

このたびの新潟県、福島県及び福井県における豪雨災害に関連し、破堤・洪水や土砂災害の実態調査に対して、本学積雪地域災害研究センター　高濱信行教授を研究代表者とする研究グループ（京都大学、東北大学、大阪市立大学、長岡技術科学大学、金沢大学、福井大学、同志社大学の８大学２１人が 参加）に、科学研究費補助金特別研究促進費として、１千万円の交付が内定した。

○　農学部　水害被災地の施設状況調査

農学部では、水害被災地の施設状況調査のため調査メンバーを結成し、7月１６日（金）に被災地の施設状況調査を実施した。

また、8月４日（水）５限に同調査の「緊急報告集会」を開催するとともに、学生に対しボランティア活動への参加を呼びかけた。

○　災害義援金の募集について

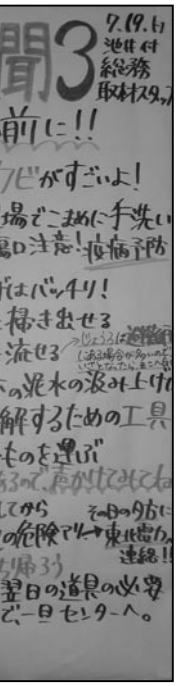
1）　本学役員及び部局長が発起人となり、教職員に対して、今回の豪雨水害により被災された方々に対するお見舞いとして「義援金」の募集を開始した。
2）　義援金額　１口1，０００円とし、１口以上とする。
3）　受付期間　平成１６年7月２８日（月）から平成１６年8月３１日（火）まで
4）　募金総額　２，５１０，０００円を新潟県へ贈呈

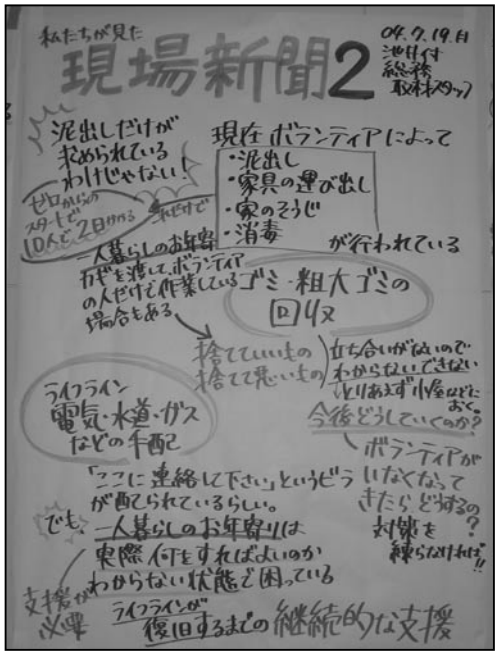
	7/16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	8/1	3	4	5	7	8	13	23	9/18	19	合計
人文学部								1		1	1	1	3	4	5												16
教育人間科学部		2	3	5			3	8	20	10	10	12	5	11	6	4	5										104
法学部								1				1		2	7					1							12
経済学部											1			3	4												8
理学部		2	24	4				2	14	8	2		1	2	2	1	2										64
医学部医学科			1							1						3		1	2								8
医学部保健学科								2		5			2	1		8	7				3	3					31
歯学部										3				3			1										7
工学部							59	14			2	1	1		3												80
農学部	5						3		5					5	3	1			15		21		15	19	4	5	101
養護教諭特別別科															2												2
教育学研究科							2				3		1														6
自然科学研究科		1	3	2	4	2	32	20	4	2	8	4	12	5	6	1	1			1							108
現代社会文化研究科				1			1	1	1																		4
研究生							1	1																			2
科目等履修生										1																	1
学生　小計	5	5	31	12	4	2	101	50	44	31	27	19	25	36	38	18	16	1	17	2	24	3	15	19	4	5	554
教育人間科学部			1	1						1	3			1			1										8
経済学部								1			1	1		1													4
理学部					1		1		1				1		1												5
医学部医学科	1			2																							3
医学部保健学科		1		1		1	5		3		1	1	2	2	1												18
工学部							4																				4
農学部																			5				4	4			13
事務局							3	3	1		3	3	4	9	7												33
教職員　小計	1	1	1	4	1	1	13	4	5	1	8	5	7	13	9	0	1	0	5	0	0	0	4	4	0	0	88
大学のバスを利用した人数　合計	—	—	—	—	—	—	(64)	(53)	—	—	(26)	(23)	(27)	(45)	(45)	—	—	—	—	—							(283)
探検部	5	13		5	3																						26
英会話研究部			3																								3
ヨット部		9																									9
Wing						1																					1
極真空手道部										8																	8
サークルで参加 合計	5	22	3	5	3	1				8																	47
総　合　計	11	28	35	21	8	4	114	54	49	40	35	24	32	49	47	18	17	1	22	2	24	3	19	23	4	5	689

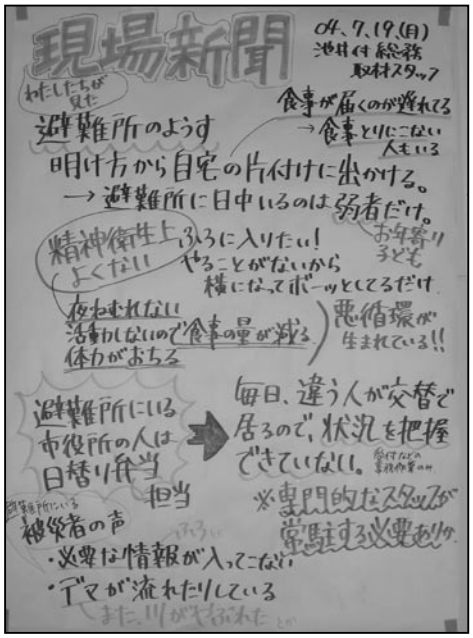
注）　本表は、大学として把握している人数を集計したもの。

※　７月２２日に参加した者の内、工学部教員２人、学生３２人、自然科学研究科学生４人は、授業のため栃尾市に行く予定であったが、急遽、ボランティア活動に切り替えて参加した。

※　農学部学生の８月７日、９月１８日・１９日の人数には、教職員の人数を含む。
その他、現地でのボランティア活動以外にも、学内サークルが大学構内で募金活動（募金総額 161,342 円）を行ったり、学生が一個人として、市民団体が街頭で行っている募金活動に、参加している。





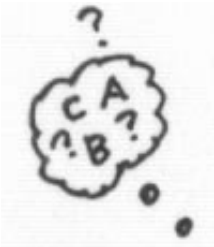


避難所

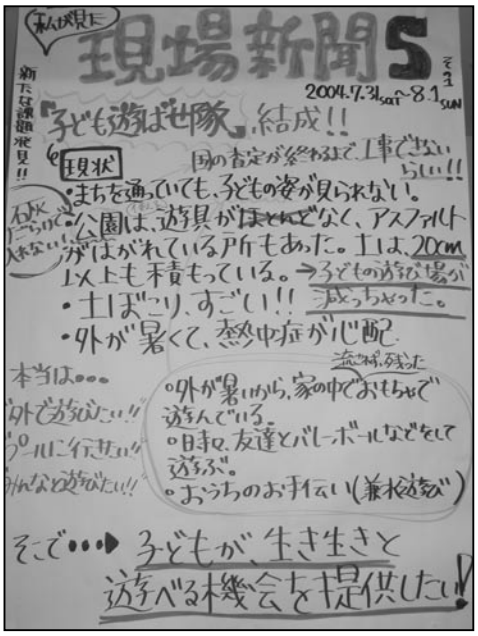
プライバシーが守られない。
動かないので、食事の量が減る。
体力が落ちる。
昼間、体の動く人たちは家の片付けに出かけている。
昼間にいるのはお年寄りや子どもたちが多い。
毎日異なる職員が担当している。

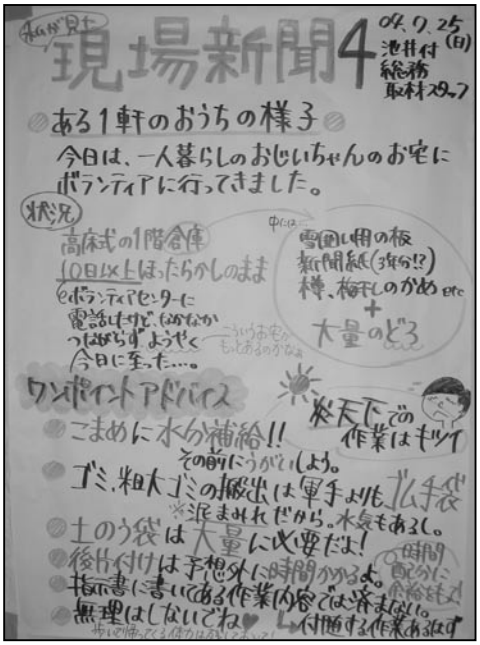
被災現場

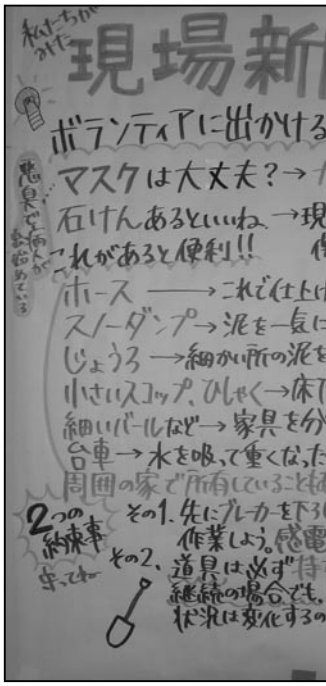
家具の運び出し
泥出し
家の掃除
消毒
御用聞き

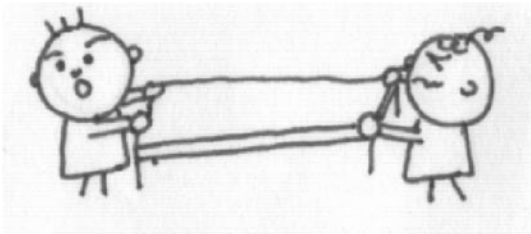


あなたはどんなボランティアができますか？また、どんなボランティアが必要なのでしょうか？









ボランティアの装備

マスク→ホコリやカビ対策（感染症にも注意）
石鹸→現場でこまめに手洗い
タオル→何枚あっても便利
長靴→結構汚れます
服装→肌を守るもの
足りないものがあったとき…
　　→ご近所に聞いてみよう。
食事→自分で準備　しっかり取ろう。

ボランティアの悩み

捨てていいもの、とっておくものの判別
指示書と違うことを言われる。
どこまでやるの？
無いから与えていいの？
自立支援ってなーに？

ボランティアの心得

ボランティア保険に加入しよう。
→各地のボランティアセンターで登録（災害の場合、大抵は無料です）。
「してあげる」ではなく、「させてもらう」。
相手の“困っていること”や“弱さ”を探すことではない。
相手に対しても、自分に対しても“強さ”や“できること”を探すこと。
自己責任・自己完結で。

おわりに

次の一歩へ

雲尾　周さん
Shu Kumoo

平成16年度末になってやっと本書は完成をみました。水害から半年以上が経過し、なによりも、大きな、大きな天災が起きたために、7・13水害が記憶から薄れている人々も多いでしょう。本書を読んで、思い出していただけましたでしょうか。現在も仮設住宅で暮らしている人がたくさんいること。廃業や失職もあって、生活再建が進まない状況。そんな現実に対してボランティアは無力かもしれません。本書に私達が記した内容は、自己満足かもしれません。それでもこの記録を残すことで、次の一歩へつながると考えています。

本書は、平成16年中に発行する予定でした。構成を考え、多くの人へのインタビューの段取りを整え、座談会を開き、と準備を進めていました。本書にも掲載しましたが、10月22日の金曜日、夕方6時から9時頃まで座談会を開き、報告書の目指すものが見えてきて、解散しました。

当時は、台風23号による水害被害がありました。報道でそれを見聞きした私たちは、新潟大学学生生活支援課の協力を得ながら、【震災がつなぐ全国ネットワーク】（全国各地の災害救援団体が連携して活動を行うためのネットワーク）のホームページ（http://www.npo-aichi.or.jp/shintuna/）などを頼りに、兵庫県豊岡市などに送る支援物資を集め始めていました。

座談会の翌日には、水害復興ボランティアとして豊岡市に向かった者もいます。まさにその日に起きたのが、平成16年新潟県中越大震災でした。

●まずはできることから

「次に災害が起きたらどうする？」という座談会の問いが現実化してしまいました。水害の時と状況が違ったのは、交通網が完全に麻痺していたこと、余震が続いて現地に入ることがたいへん危険であったことです。

現地に入りにくければ、まずは新潟市にいてできることをする。震災被災地の情報収集と並行しながら、台風による水害被災地への支援物資の収集と発送を継続しました。7・13水害級の被害がありながら、地震報道で隠れてしまった地域への支援。「今できることをしよう」、「地震復興で現地に入れるようになったらすぐいけるように準備をしておこう」という声がだれからともなく起きました。

●つながりながら進む

水害復旧支援には、新潟大学の多くの人が取り組みました。ただ、それらの活動が個々ばらばらであったこと、大学の有する専門性を活かした活動がなかなか表立ってこなかったことが反省としてあげられます。

ここで詳述することはしませんが、中越大震災の復興支援においては、大学の専門性を活かした多くの取り組みが進められています。

いわば、水害の時には点の活動だったのが、つながってネットワークとなっています。

●経験を伝える

水害復興時は、猛暑でした。ボランティアセンターではさかんに、水分補給をしっかりするように呼びかけ、水を持っていくようにボランティアに声をかけていました。でも、水は重いし、どれくらい持っていけばいいのかという目安が分かりません。すでに1日泥だし作業を経験した私達は、その日、2リットルの水を一人で消費しました。

本書にも登場した現場新聞に、そのことを書いてもらったわけです。実際に作業を経験した人の言葉は有用です。けしてずっとボランティア本部にいて指示を出す人がわるいということではなく、現場は経験しなければ分からないことが多く、また状況が刻々と変わっていくのです。だから、活動体験者から情報を収集

して、次の参加者に提供していくことが必要なのです。

●参加者や相手の立場で考える

今書いた水の問題もそうですが、実際に参加する人の立場から考えなければ、活動が広がりません。水害復興ボランティア派遣のために、新潟大学はバスを運行しました。そのこと自体はとてもありがたいことでしたが、その情報が記された掲示には、出発時間しか書いてありませんでした。学生にとっては、何時に帰って来ることができるかが重要なのです。夜にバイトや様々な用事があるけれども行きたい、でもあまりにも遅くなるなら・・・。そう考えて、二の足を踏んだ人は多いでしょう。帰着時間を保障できないとはいえ目安だけでも示してもらえれば、もっと参加者は増えたことでしょう。すこしくらいの遅れなら、携帯電話で対応可能な場合も多いでしょうし。

中越地震後、附属長岡幼稚園・小学校・中学校震災復興ボランティアのバスを出す際には、帰着予定も募集情報に加えました。おかげで多くの学生が参加できたようです。

●ボランティアへの背中をおす

ボランティアの経験を伝えること、参加者の立場で考えたボランティア支援策を行うことは、参加へのためらいや不安を消し去ってくれます。実際、水害復興ボランティアに私達がこれだけかかわれたのも、知り合いからダイレクトに情報がはいってきて、日ごろから活動をともにしている人から誘われたことが一番大きいのではないでしょうか。

もちろん、なんの関係も持たずに一人でボランティアに参加している多くの人がいます。そんな強い意志を持つ人は、自分で情報を収集したりすぐにボランティアを始めたりすることができます。しかし、ボランティアをしたことがない人、したいけどどうすればいいかわからない人、ボランティアの内容がわからず心細い人の方がはるかに多いでしょう。そういう人たちの背中をおすようなこと、一歩を踏み出す決心を働きかけることが、自分でボランティアをすることと同等以上に重要ではないか。それが座談会後にみえてきた方向でした。

●経験から生まれたコーディネート組織

中越地震の復興ボランティアをコーディネートする組織として、学生によって運営される、震災ボランティア本部が発足しました。中越地震復興支援に関するまとめはいずれされるでしょうから、活動の詳細はそちらに任せますが、7・13水害の復興ボランティアでまなんだことが実を結んだといえます。

7・13水害の復興はおわったわけではありません。中越大震災の復興にも長い年月がかかるでしょう。その間、震災ボランティア本部は続くかもしれませんが、解散するかもしれません。「震災」の文字が取れて、ボランティア本部とか、ボランティア・センターとか、変わるかもしれません。

そして、学生も次々卒業し、新たな生活の場に移っていきます。そこで何をするのか。一方で大学には次々と学生が入ってきますが、この新しい学生に何を提供して、個々人がどんな活動をするのか。

それぞれの「次の一歩」を常に摸索していくと、本書を閉じるにあたって使う言葉は、「おわり」ではなくなります。

つ づ く

7・13水害を始めとする多くの被災された方々の一日も早い復興を願って

学生ボランティアの心得・・・みなさんで作り変えていってください。

●其の一　まずは身近な人に伝えていく。
学生同士、近い立場で伝えていく。

●其の二　がんばりすぎたら長続きしない。
自分のためのボランティアととらえて、楽しむこと。

●其の三　自分のまなんでいることが活かせないか考える。
考えつかなかったら先生に聞いてみる。

●其の四　無責任になっては困るけど、仕事にしているわけではないからこその、縛られない、自由な発想を大切にする。

●其の五　一般常識、社会経験がないのは当たり前。
ここが成長の機会。多くの人と接して謙虚にまなぼう。

背中に手を当てる人。

～中越大震災後、小千谷市ボランティアセンターからのメールより～

私には何も出来ないのだから、ばあちゃんやじいちゃんの、背中に手を当てて静かに、
一日中はなしを聞きましょう。小千谷だけでも、30,000 人のボランティアが必要です。
わたしだけでは何も出来ないに等しいです。
ひとりから動いて、何も変えられませんが、ひとりが動かなければ始まりません。
笑いながら、走らないで歩き続けましょう。

編集　　７・13 水害新潟大学ボランティア編集委員会
執筆　　大滝　優果　　角玄　直樹　　雲尾　周
　　小杉真佑美　　小林　重久　　小林　隼也
　　佐野　智香　　清水隆太郎　　高橋　祐子
　　塚越　由佳　　布施健太郎　　古山　祐子
　　宮崎　道名
写真　　雲尾　周
　　小見まいこ（株式会社　博進堂）
　　宮崎　道名（道屋）
　　和田　一良（編集工房　わらく）
イラスト　阿宮　由子（ＮＰＯ法人まちづくり学校）
　　宮崎　道名（道屋）

7・13 水害新潟大学ボランティア編集委員会（50 音順）

大滝　優果（教育人間科学部 3 年）
角玄　直樹（教育人間科学部 4 年）
雲尾　周　（大学院現代社会文化研究科助教授・まなび屋顧問）
小杉真佑美（教育人間科学部 3 年）
小林　隼也（教育人間科学部 2 年）
佐野　智香（ＮＰＯ法人まちづくり学校）
清水隆太郎（魚沼市立堀之内小学校非常勤講師）
古山　祐子（教育人間科学部 3 年）
宮崎　道名（道屋主宰　ＮＰＯ法人まちづくり学校）

＜災害ボランティア報告書　～実践編～＞

７・１３水害　新潟大学ボランティア活動のあしあと

7・13 水害新潟大学ボランティア編集委員会　編
平成 17 年 3 月 28 日発行
発行　新潟大学

装丁・レイアウト　道屋
〒 950-2161　新潟市五十嵐西１４－３６
TEL/FAX：025-261-3937

印刷　株式会社　博進堂
〒 950-0807　新潟市木工新町 378-2
TEL：025-274-7755　FAX：025-274-7679

災害ボランティア報告書

７・１３水害　新潟大学ボランティア活動のあしあと